

42370

教科書文庫

4
810
42-1938
200030 1514

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

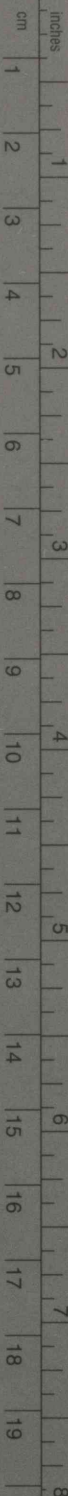


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
0ml5
資料室

女子新國語讀本

新制版

卷八

375.9
Om 15

資 料 室

京都帝國大學
教授文學博士 澤瀉久孝
奈良女子高等
師範學校教授 木枝增一
共編

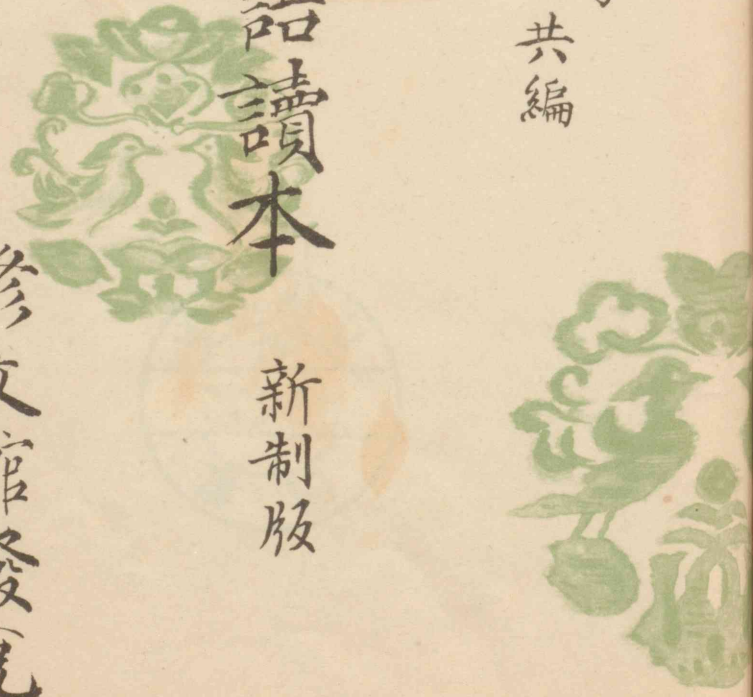
女子新國語讀本

新制版

修文館發兌

文部省檢定濟

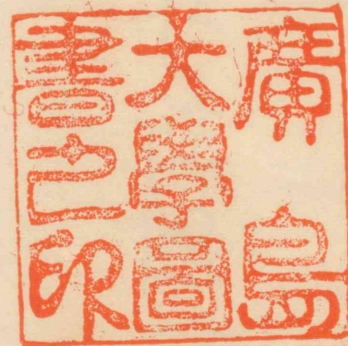
昭和十三年二月十五日
高等女學校實業學校國語科用





(第十八課參照)

(能) 川 田 隅





編纂の趣意

本書は、昭和十二年三月二十七日改正發布せられたる高等女學校國語科教授要
目に則り、左の諸點に留意して編纂しました。

- 一 國民精神の體得——これに就いては、國體の精華、國民の美風偉人の言行を敍し、特に日本女子としての特性を養ふに足る材料を選定しました。
- 二 文學精神の涵養——これに就いては、國文學の本質に基づき、時に於ては古今、形に於ては様式の種々相に互り、心情を優雅ならしむべき材料を選定しました。
- 三 國語精神の把握——これに就いては、各教材が總べて醇正なる國語に採つてあるのは勿論、更に國語の正しい相を認識せしむると同時に、國語愛護の念を培ふに足る特別なる材料を選定しました。

右三點の外、世界の情勢を知らしめて圓滿なる國民的常識を養成するに足るもの、女子の本務たる家庭生活の趣味を向上せしめるに足るものをも加へました。

昭和十二年七月

木 枝 増 一
澤 瀉 久 孝

目次 卷八

一	國文學と國民生活
二	表現せざる表現
三	俳句抄(近世上)話
四	深い心
五	落葉松
六	倫敦だより
七	百蟲譜
八	川柳點
九	諺
一〇	長柄堤の訣別

藤村	作	一
志田	義秀	八
萩原	井泉水	六
得能	文	三
北原	白秋	三
編者	者	三
横井	也有	三
金子	元臣	三
藤井	乙男	三
坪内	逍遙	三

三	口語と文語
三	近古短歌抄
四	笑聲
五	寺子屋
六	重子の井
七	末ひるがり
八	隅田川
九	花田心
一〇	茶道の精神
一一	太平洋時代

吉澤	義則	六
川路	柳虹	六
竹田	出雲	六
近松	門左衛門	一四
狂言	記	一四
觀世流	謡曲本	一三
西川	一草亭	一四
奥田	正造	一五
鶴見	祐輔	一四

附録
日本文學年表

……終……



藤村 作
福岡縣の人、國文學者、文學博士、
明治八年(三五)生。

慰藉
精髓

女子新國語讀本 新制版 卷八

一 國文學と國民生活

藤村 作

文學といふものは、その性質からいへば、詩人・作家が永遠なる或ものを見出して、これを表現する所に本意があり、眞の價値がある。千年前の歌で、今日の我々が讀んでも深い感に打たれ、貴い慰藉を感じるやうな所謂名歌の、いつまでも亡びない所以は、この永遠なるものを擲んで、これをよく表してゐるからである。自然の歌であれば、自然の精髓とか生命とかいふ永遠の相を歌ひ出したものならば、時は如何に移つても、

人間性

亡びることは容易にあるまい。又、人事を取扱つた文學にしても、それが不變な人間性なり人情なりを確に把持して、これを表したものであれば、何時の時代の人にも理解を持たせ、同情感激を起させて、亡びないものである。人間の生活の外面の相は、時代を追うて色々に變化し、言語文法もいろ／＼に變遷するから、古代文學は讀み難く、解し易からずなつて行くのは已むを得ないけれども、その變化し行く生活の外面を剥ぎ去り、むづかしく難解になつた言語をよく讀取つて見ると、其の中に包まれたものは、決して後世の人に通じないやうな、又一時代的で直ぐ亡びてしまふやうなものでなく、今日の我々の靈にもよく響き、我々の生活に共鳴を起さしめるのである。不滅の傑作であれば、必ずさうあるのである。

傳統

玉石混淆

我々の思想や生活は、時代と共に新しく移つて行くものである。又、變化して行かねばならぬものである。併し、全然新しくなるものと思つたら、又大きな誤であらう。我々は傳統の影響を受けることが甚だ多い。自分自らは新人と稱し、新しい生活をしてゐると誇つてゐる人でも、存外多く古い傳統を受けてゐるものである。唯さう氣づかずにある人が多いのである。その傳統の中には、これを後世から批判すれば、よいものもあれば、よくないものもある。所謂玉石混淆の有様である。従つて、知らずにをればよくない傳統の拘束を受けてゐる人もあるのである。又、よい傳統を受けてゐる人でも、自覺的でない爲に自然これを伸ばして行く力の強くない人も見るのである。

長を採り短を補ふ

普通教育の上で國語教育、國史教育を重んずる理由は、外にもあるが、その主なるものは、自國の國民性、國民精神に自覺を持たせることに在ると考へる。歐米の他國、他民族から彼の長を採つて、我の短を補ふといふのは、明治維新以來の我が政治の大方針の一つであるが、これは決して生活の外面のことに限られてはならない事である。採長補短は國民性、國民精神上までも及ばねばならぬ。一國民の國民性なり、國民精神なりを、その古來のものまゝに、石の如く固まつたもの、絶對のものとして考へてはならぬ。それには變遷もあり得べきものであり、又意識的に改善も企つべきものである。唯併しながら、其の中にはその國民に取つて變化、改善を許さない絶對的、根本的のものがあり、それがその國民の特徵、長所となつてゐ

るものであつて、それを涵養して行くことが最も大切であることを忘れてはならぬ。今日世界の強國を成してゐる國民を見るに、これ等の國民の偉大をなし來つた根柢は、その國民の持つてゐる特殊な性格の極少數の長所を伸長し、發展させて來たものであると信ぜられる。それが衰へる時、その國民は衰へ、それを多く失ふ時、その國は滅亡すると思はれる。言ひかへれば、採長補短の道に由つて國民性を養育改善し、國民精神を改良して行くことは必要であるが、古來傳へ來つて、今日特異なる國家を成し、國民團結の基となり、國民文化を作り上げる上に與つて最も必要であつた國民性の長所を益、磨き立てて、その光を益、發揮させることは、決して閑却すべからざることである。

提携する
普及する

告白

此の國民性の自覺といふ上に最も役立つものは國文學ではなからうか。國文學を國史と相提携させ相助けしめて、これを國民の間に普及して行くことに由つて、この國民性の自覺が成されると思ふ。何となれば、國文學といふものは、國民自身が畫がいた自家の影像である。自己の傳記である。そして、それは偽らざる内面生活の告白である。偽らざる告白なるが故に、道徳の標準から見れば、必ずしも善とされるものに限らず、惡とされるものまでも、その儘に表されることが多い。そこに動もすると、文學が社會から嫌はれる理由もあるけれども、亦それによつて國民生活・國民精神の眞相を見詰むるを得る便の頗る大であることを考へねばならぬ。その眞の相を見詰むるといふことが、我々が日本國民としての自覺

を得る第一歩であると思ふ。

斯う考へて來ると、我々が現代に生まれ合はせて、遠い千幾百年來の國文學を知らうとし、これを研究するといふことは、唯過去の爲に過去を知り、過去の爲に過去を研究せんとする道樂でもなく、遊戯でもなく、物好きでもなく、今日の我々の必要の爲であり、我々自身の生活の爲である。我々が國民性・國民精神の理解と自覺とによつて、國民としての生活の一步一步を確乎としたものにし、充實したものにし、力強いものにしたい爲といふことが出来る。我々が日本國民として、拜外の夢に迷うて何の爲に生きてゐるかわからぬやうなあやふやな弱い生活から脱して、強い國民的自信を持つ生活を得たいといふ當然の要求の爲といふことが出来る。(日本文學聯講に據る)

物好き

拜外

あやふやな

日本文學聯講

藤村作編、五冊、

上代より明治まで

の國文學の概観を

多くの國文學者が

説いたもの、本文

はその第一期に據

つた、昭和二年三

月、昭和八年

五月、九月刊行。

志田義秀

富山縣の人、國文學者、東京帝國大學講師、明治九年(三三)生。

維摩

維摩詰、釋迦と同時代の人、その教化を輔けた。

山谷

黃庭堅、支那宋の詩人、江西詩派の祖、西曆一〇五一年歿、年六十一。

南畫

南宗畫の略、北畫(北宗畫)に對し、支那繪畫二大流の一、唐の王維を祖とす、氣韻を尙び多く山水を取扱ふ。

俳畫

中入

二 表現せざる表現

志田 義秀

「言はぬは言ふにまさる。」と云ふことは、世の中の人々が能く云ふことである。それでゐて饒舌を逞しうせずにおられぬのが人の常である。「維摩の一黙、その聲雷の如し。」と云ふやうに、沈黙は雄辯であることも吾々は承知してゐる。それでゐて、沈黙であり得ないのが吾々の常態である。詩人山谷は「萬言萬當一黙ニ如カズ。」と云ひながら、多くの詩を作つてゐるのである。

然るに、この言ふにまさる無言、沈黙の雄辯が、藝術の形式として取扱はれ、ば、こゝに恐しい藝術が出来上るのである。南畫の餘白、俳畫の省筆、茶道の靜寂、禪の默想、能樂の中入、邦樂

間句切

大須賀乙字

俳人、俳論家、東京音樂學校教授、大正九年(二五)歿、年四十。

蛇足

世阿彌

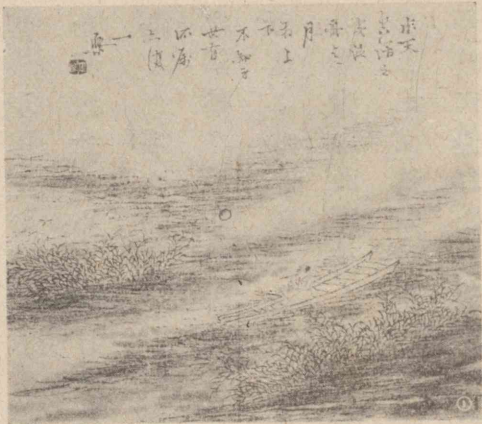
名は元清、室町時代に於ける能樂の改革者、嘉吉三年(三三)歿、年八十一。

の間、俳句の句切などが即ちそれである。茶道の靜寂、禪の默想も、藝術的境地と見られよう。言換へれば、表現せざる表現が、表現以上の藝術的效果を収め得るので、かゝる藝術的形式を發達せしめて、今日なほ完全にこれを持続してゐるのは、恐らくは我が日本のみであらう。この事に就いては大須賀乙字が特に論じて居り、早く氣づいてゐる人もあるのであるが、私もこゝに蛇足を試みようと思ふのである。

能樂の改革者として、寧ろ嚴格な意味に於ける能樂の創始者として、作舞、作詞、作曲すべてに天才を有し、優れた創作家で同時に優れた評論家であつた世阿彌は、その能樂觀を述べたものの中に、動く事を表すには、動かない事を以てせねばならぬといふ意味の事を述べてゐる。激動を表すには、無動を以

早 態

てするのが有効であると云ふのである。當流には、總べて早態戒むる也」とも云つてゐる。世阿彌は、かゝる藝術觀を以て



(筆田竹) 畫 南

猿樂の改革を謀つたので、従つて、世阿彌以前の猿樂は、激動は激動を以て表す主義のもので、跳躍的の舞踏劇を基本となしたことは、この點からも推せられるので、世阿彌に至つて、始めて表現せざる表現の効果を認めて、暗示的象徴的の手法に依る、高級な象徴的藝術たる今日の如き能樂を打建てたのである。されば能樂は、その中入を考へるまでもなく、能全體が既に表現せざる表現

暗示的
象徴的藝術

燕村
秋はもの
蕎麥の
不作も
なつかしき

焦 點

マールブルヒ大學
ドイツ、ライン河
畔のマールブルヒ
にある大學、西曆
一五二七年に創
設。

神 學

ルードルフ・オット

西曆一九一七年か
ら一九三〇年まで
マールブルヒ大學
に勤む、西曆一八
六九年生。
髣髴する

の主義に依つてゐるもので、従つて、形式全體として、茶道の靜寂禪の默想、俳畫の省筆に類するといへるのであるが、しかも、かゝる全體の形式と共に、その焦點たる妙所をなすものは中入であるから、かゝる全體觀からいへば、能樂は、餘白を有する暗示的繪畫たる南畫、句切を有する暗示的文學たる俳句に類するといへるであらう。

私はかつて友人から、マールブル



(筆村燕) 畫 俳

ヒ大學の神學教授ルードルフ・オットー氏の「聖」といふ神學書の所説を聞く事を得た。同書は、神に對する感情を髣髴せしめ得るものは、音樂を聞く時の感情であるとし、それも樂曲を

終曲

耳よりな

至妙至靈

聞きつゝある時の感情よりも、曲を終へて樂器が靜寂に歸し、聽衆が沈黙を守つてゐる時、同書はこゝに「沈黙といふ言葉を、用ひてゐるさうであるが」の感情である、と云つてゐるさうである。私は之を非常に面白く聞いたのである。終曲の後の沈黙が、神に對する感情を髣髴せしめるものであるとの所論は、吾々には如何にも耳よりな論である。終曲後の沈黙にこれ程の至妙至靈の意義を考へるのは、やがて藝術上に於ける表現せざる表現の至妙至靈の効果を認めるものといへるであらう。しかも、奏樂後の沈黙といふことは、何れの國に於ても共通的に考へられることであるが、我が國に於ては、それ以上、それが音樂に於ける間や、能樂に於ける中入として存するのであり、又、同じ意義のものとして、茶道や禪に全體的形式

として存するのであり、音樂以外のものとしては、南畫の餘白、俳句の句切として存するのである。

西諺にも「言談は銀、沈黙は金」といふやうである。オットー氏のこの見方は、畢竟沈黙の雄辯といふことを強調して考へて、そこに神祕的の或物の存在を認め、一面又宗教味と藝術味との極致に於ける一致といふことにも觸れてゐると思はれる。

彼の地の表現主義といふものが、我が國の一部でも奉ぜられてゐるやうである。併しながら、彼の表現主義なるものは、自然主義の唯物的思想の反動としての唯心的の思想が種々な主義を生み來つた後、遂に極端に行きついて生じたもので、世界大戰の慘禍を経た彼の地の國民の生出したもの、又、生出

極致
表現主義

西曆一九一二年に
ドイツを中心とし
て興つた藝術上の
一主義、作家個人
の強烈な主觀を通
して、端的に事象
の内部生命を表さ
うとするもの。

自然主義

反動

文化交流

可能性

すべきものであつたのである。今なほ未完成の主義と見られてゐるやうでもあり、又彼の地の國民に於て始めて意義あるものと思はれる。我が國の非表現的表現主義は無主義も亦主義であると同じ意味で、やはり一種の表現主義と云へるけれども、彼の表現主義とは歴史を異にし、その意義を異にすると共に、悠久性を帯びるものであるが、世界的に文化交流の行はれつゝある今日、そして、彼に於て東洋研究、特に日本研究の盛になりつゝある今日、彼の地の思想界或は藝術界の一面に迎へらるべき可能性があると思ふのである。要するに、藝術は必然な内心の要求から生まれるものであるとすれば、大戦の慘禍を直接に經驗した結果の焦燥と絶望とを感じない我が國の國民に、彼の表現主義のやうな藝術が必然に生まれ

浮世繪
ゴーホ

オランダの畫家、
西曆一八九〇年
歿、年三十七。

俳文學の考察

志田義秀著、俳句
に關する研究論文集、
昭和七年(三五)
三三月刊行。

ねばならない理由が私には發見されない。由來我が國民は、嘗ては對岸の大陸に對し、明治以來は歐米に對して、餘りに受動的であり、輸入的であり、模倣的であると共に、自己の有するものの價值と尊さを忘れ勝であつた。そして、我が國の浮世繪に據つて創造されたゴーホの畫が、我が國に逆輸入的に迎へられたりもしてゐるのである。受動的であるばかりが國民の能ではないであらう。

(俳文學の考察)

萩原井泉水

名は藤吉、東京市の人、俳人、明治十七年(三五四)生。

北枝

立花氏、加賀國(石川縣)の人、俳人、享保三年(三七〇)歿。

三俳話

萩原井泉水

一拾ふ

芭蕉の門人北枝といふ人は、大きな菅笠を被り、檜の杖をついてよく出かけて行つた。近處の子供が「北枝をぢ、何處へ行くのぢや」と問ふと、彼は「發句を拾ひに行くのぢや」と答へる。子供はその答を面白がつて、いつも同じやうに問ふと、又いつも同じやうに答へたといふことだ。

私たちの同人のうち、「句をさづかる」といつてゐる人がある。「句をさづかる」といつても、句を作ることには違ないのだが、「作る」といふと、作爲技巧私意といふ心持が混じ易い。さうした心持を交へずして、ほつと生まれ出たところのものを、兩

作爲

手で受けるやうにして自分のものとする氣持を「さづかる」とはいつたものなのである。北枝のいふ「句を拾ふ」も、やはりこの氣持だらうと思ふ。ちやうど熟して落ちて來る木の實を拾ひ上げるやうに。——それこそ「拾ふ」とはいふが、本當に自分にさづかつたものに外ならぬ。

二寫生

何事でもその物を正しく見るといふことは必要である。又、それを正しく表現することも必要である。この意味から、繪畫に於て寫生といふことを第一歩とすると同じく、俳句に於ても寫生から出發するといふことは、教程としてよろしいけれども、それはたゞ第一課たるに過ぎない。南畫に於ても寫生よりは寓意といふことを重んずる。寫生といふと客觀

教程

形態
氣息
さながらに
寫意

蕪村
谷口氏、攝津國(大阪府)の人、俳人、畫家、天明三年(西曆一八一三)歿、年六十八。

的の形態に捉へられる。その形態の奥にあるところの生命に觸れて、その氣息をさながらに寫さうといふのが寫意である。そこで、如何にしてその生命に觸れるかといふに、こちらに生命を以て引出すのである。これは單に眼で見るだけでは出来ない。心を以て見る、即ち感ずるのである。十人が同じ物を見ても、一人にだけしか感じられぬことなのである。その物は「外」にあるにせよ、それはその人の「内」にあつたものだといつてよい。それは拾つたものであつても、決して偶然に拾つたものではない。初からその人のものなのである。

三 歸 る

行き／＼てこゝに行き行く夏野かな

といふ蕪村には、蕪村らしい心のすゝみとはげみがある。そ

芭蕉
一三頁頭註参照。
奥の細道

芭蕉が元祿二年(西曆一六八七)三月江戸を出て、奥州・北陸・美濃と六ヶ月間旅をした時の俳文紀行、元祿七年(西曆一七〇二)刊行。

白河の關

岩城國(福島縣)西白河郡

平泉

陸中國(岩手縣)磐井郡

出羽

秋田・山形兩縣地方をさす。

越後路

新潟縣

敦賀

越前國(福井縣)。

れはそれでよろしい。だが、

人聲やこの道かへる秋の暮

といふ芭蕉の芭蕉らしい、さびしい、明かるさと親しさこそ、一層、俳句の心ではないだらうか。俳句の境地は「往く」よりも「歸る」ところにあるやうに思はれる。往く時には、見るものもの新しさ、めづらしさに氣が散らされる、うきたつといふ氣持になる。歸る時には、知つてゐるといふ安らかさで、その安らかさの中に、自分を歩ますといふ落着がある。芭蕉の「奥の細道」にしても、江戸を出て、白河の關を越えて、平泉まで、これを往く道とすれば、出羽に出て、越後路に出て、敦賀まで、これは歸る道である。文章としては、往く道の方に雄大な、又は、悲壯な名文があるけれども、俳句としては、歸る道の方に名吟が揃つてゐる。

る。
 しかし、何としても先づ往かなければならぬ。往くことに
 勇み、又往きて苦しむといふ精進の心がなければならぬ。而
 して、往く苦しみを通して後、歸るといふ段になつて、始めて、歸
 る心の澄んだ、歸る心の安らかさから、好い句は生まれて來る
 のである。

四 我 が 宿

禪林に「歸家穩坐」といふ語がある。これは一大事を悟了し
 た後の氣持をいふ譬喩であつて、この上は何も求むる所はな
 い、自分の家に歸つて穩に坐してゐるが如くである、又悟つた
 からとて別に新しい世界に入つたのでもない、たゞ自分の家
 に主となつたが如くである、といふのであらうと思ふ。だが、
 この語は俳句の道に於て味はうても面白いと思ふ。

禪林
 悟了する

尾花澤
 羽前國(山形縣)北
 村山郡にある町。

或日の微笑
 萩原井泉水著、隨
 筆集、昭和八年(二五
 五)七月刊行。

俳句の道といふものは、究極するところ、往つて、歸つて、而し
 て、我が宿を得て坐るといふ、この氣持にある。旅の宿にして
 もいふ。それを「我が宿」として安らかに寛ぎ得るところに俳
 句の心がある。芭蕉が「奥の細道」の旅に、出羽の山越で命がけ
 の思をした後、尾花澤の清風亭に着いた時、
 すゞしさを我が宿にしてねまるなり

と吟じてゐる。この「ねまる」は脚をのばして寝るとも解せら
 れるが、山形地方の方言では「坐る」ことを「ねまる」といふさうで
 ある。旅の宿をも「我が宿」にして、涼風を大きく懐に容れて坐
 つてゐる、この芭蕉の姿には、實に安らかな寛ぎがあるではな
 いか。これぞ「歸家穩坐」の「涼しさ」である。「涼しさを我が宿に
 して」この「我が宿」といふ言葉を、味はふべきである。(或日の微笑)

宗鑑

名は範重、近江(滋賀縣)の人、連俳の名家、天文二十二年(三三三)歿、年八十九。

守武

伊勢(三重縣)の人、皇大神宮神官の連歌師、天文十八年(三三〇)卒、年七十七。

貞徳

京都の人、俳人、承應二年(三三三)歿、年八十九。

宗因

名は豊(肥後)熊本縣)の人、榊林派の俳人、天和二年(三三三)歿、年七十八。

言水

奈良の人、俳人、享保七年(三六六)歿、年七十三。

來山

小西氏、大阪の人、俳人、享保元年(三三三)歿、年六十三。

鬼貫

攝津(大阪府)の人、俳人、元文三年(三三三)歿、年七十八。

松尾芭蕉

名は宗房、伊賀國(三重縣)の人、俳人、蕉風の祖、元禄七年(三三三)歿、年五十一。

清瀧

京都市右京區清瀧川、京都府葛野郡に發し、高野山の下を通つて保津川に注ぐ。

榎本其角

江戸の人、寶井氏をも稱す、蕉門、寶永四年(三三六)歿、年四十七。

服部嵐雪

淡路國(兵庫縣)の人、蕉門、寶永四年(三三六)歿、年十四。

四俳句抄 (近世上)

元朝の見るものにせん富士の山	山崎宗鑑
笠を著ば雨にも出てよ夜半の月	同
元朝や神代のことと思はるゝ	荒木田守武
冬籠蟲けらまでもあなかしこ	松永貞徳
ゆきつくす江南の春の光かな	同
菜の花や一もと咲きし松のもと	西山宗因
お静かにござれ夕陽いまだ残んの雪	同
猫逃げて梅ゆすりけりおぼる月	池西言水
瓜の果はありけり海の音	同
春風や堤ごしなる牛の聲	小西來山

秋立つやはじかみ漬もすみきつて	同
さみだれや鮓のおもしろなめくじり	上島鬼貫
朝寒のけふの日なたや鳥の聲	同
山路来て何やらゆかしすみれ草	松尾芭蕉
清瀧や波に散込む青松葉	同
菊の香や奈良には古き佛達	同
埋火や壁には客の影ほふし	同
夕立や家をめぐりて家鴨なく	榎本其角
聲かれて猿の齒白し峰の月	同
ぬれ縁になづなこぼるゝ土ながら	服部嵐雪
筍や稚子の齒ぐきの美しき	同

得能 文

富山縣の人、哲學者、文學博士、慶應二年(三五)生。

五深い心

得能 文

マーテルリンク
名はモオリス、ペルギーの人、詩人、劇作家(西曆一八六一)。

跌宕である
ものゝふの
源實朝の歌、金槐集所收

浅い鍋は早く沸きたつ。深い思は言語に現れない。浅人は多語なりとはこの謂である。深い喜や深い悲しみには言葉が無い。言葉に現れるのは真に深いものではない。沈黙は深い印象を與へる。沈黙には深い意味がある。マーテルリンクが「蜂は暗黒裏に働き、思想は沈黙裏に働き、徳は祕密裏に働く。」といったのは面白い語である。詩歌などに於ても、徒に嬉しい悲しいといふよりも、却つてこれを露骨にいひ現さないところに、無限の情趣が味ははれる。例へば、壯烈である、跌宕である、と感歎の語を發するよりも、
ものゝふの矢竝つくるふ小手のうへに

霰たばしる那須の篠原

ソクラテース
ギリシャのアテネの人、大哲學者(西紀前四七〇—前三九九年)

基督

猶太の人、キリスト教開祖(西紀前四一—元)

晦澁

といつた方が遙に壯大である。それと同じく、悲しいといはぬところに真に深い悲しみがあり、嬉しいといはぬところに真に深い喜がある。我等がソクラテースや基督の運命に對して、無限の感慨をいだくのはこのためである。
我等が深い心の奥底には常に動いて止まぬものがある。この活動が鈍り、若しくは停る時に、我等は語を發する。しかも、この活動の真相をそのままに發露することは困難である。されば、獨創的な思想家の書を読む時は、常に晦澁感を感じ、このやうな思想家は、出來るかぎりおのれの思想を現し、これを傳へようとするのであるが、無限の活動はこれを捕捉することが容易でない。それで、種々様々にこれをいひ現さ

うと苦心する。そして、読者はその言葉をたどつて、その思想を得ようとするのであるから、その眞實相に達することが困難なのである。

既にいひ現されると動かなくなる。このいひ現された動かないものを再び整頓し、改めて排列すれば、平明易解ならしめることが出来る。これが即ち獨創的思索家の書よりも、その紹述者の書が比較的に解しやしい所以である。これは深遠な思想のこのみではない。我等の日常生活に於ても亦さうである。表面に現れた多くのことは、ありふれたこと何の奇もないやうであるが、しかし、その奥底にはいひ現しがたい深い活動があるのである。

奥の奥にあるもつとも深いものは、普通の意識ではなく、意

思索家
紹述者

魚鼈

識の奥底にあるものである。これが人格の核である、眞の我である。我等が深く思に沈む時は、眞の我が自らを見ようとするのである。我が我を見ようとする時には何の語もない。水中に魚鼈が跳れば、水面に泡が浮かぶ。この泡が語である。しかし、跳るところが深ければ、泡は立たない。跳るところが水面に近ければ近いほど、ますますおほく泡が立つ。語の多いのは活動が浅いところに行はれる證據である。そして、跳躍の形状によつて、泡の形状に種類があるとおなじく、活動の様式によつて、語がそれに應じて現れる。語はその人を表す。

かくて生きた沈黙は、我等が深く自らの内に沈潜するのである。深く自らの内に沈んで自らを見る時に、我は具體的の

純粹思惟
實踐理性

意志する

非有

ルーテル
名はマルティン、
ドイツの宗教家、
宗教改革をなし、
新教を興した。西
暦一五三一年

全體に於て現れる。具體的のものは語で表されない。具體的の全體は生きてゐる、不斷の活動である、自由である。この活動は自らに法則を賦與する。それが理論的に働けば純粹思惟であり、實踐的に働けば實踐理性である。前者には學の基礎が立てられ、後者には道德の基礎が立てられる。自己が自己に與へた法則に従つて働けば善であり、働かなければ惡である。惡は消極的である、働かないことである、意志しないことである、非有である。従つて、善惡は事の成果に在るのでなく、ルーテルのいつたやうに、善事は善人を作らず、善人が善事を作る。」のである。

そして、我が深く自ら省みて法則にそむいたと感ずる時に、悔恨が起る。悔恨から罪の意識が起る。しかし、深く沈潛し

淺人零語

得能文著、六篇か
らなる隨筆・小品
集、昭和四年（三六
）四月刊行。

ない時はこの意識は起らない。されば沈潛することの淺い人には、罪の意識はない。随つて、自ら辯護しようとして試みる。こゝに於て語が多い。やがては不平を訴へる。自分ほど不幸なものはないともいふ。眞實に切實に不幸を感ずるのは深く自ら省みた時である。すなはち、深い奥底が動いてゐるのである。動いてゐる時は語はない。痛切な深い悲哀も、大歡喜の法悦も共に語はない。しかも、大地は震動する。

（淺人零語）

北原白秋

名は隆吉、福岡縣の人、詩人、歌人、明治十八年(一八八五)生。

からまつ



六落葉松

北原白秋

からまつ
からまつの林を過ぎて、
からまつをしみじみと見き。
からまつはさびしかりけり。
旅ゆくはさびしかりけり。

※

からまつ
からまつの林を出て、
からまつの林に入りぬ。
からまつの林に入りて、

また細く道はつづけり。

※

からまつ
からまつの林の奥も
わが通る道はありけり。
霧雨のかかる道なり。
山風のかよふ道なり。

※

からまつ
からまつの林の道は
われのみか、ひともかよひぬ。
ほそほそと通ふ道なり。
さびさびといそぐ道なり。

※
 からまつ
 の林を過ぎて、
 ゆゑしらず歩みひそめつ。
 からまつはさびしかりけり。
 からまつとささやきにけり。

※

からまつ
 の林を出て、
 浅間嶺にけぶり立つ見つ。
 浅間嶺にけぶり立つ見つ。
 からまつのまたそのうへに。

※

からまつ
 の林の雨は



かんこ鳥

なけど(なけれど)

水墨集
すゐぼくしふ
 北原白秋著、詩集、
 大正十二年(一九二三年)
 六月刊行。

さびしけどいよよしづけし。
 かんこ鳥鳴けるのみなる。
 からまつの濡るるのみなる。

※

世の中よ、あはれなりけり。
 常なけどうれしかりけり。
 山川に山がはの音、
 からまつにからまつのかぜ。

(水 墨 集)

七倫敦だより

編

者

清適
大慶の至
恙無く
消光

京
京都市

大袈裟に

拜啓其の後は御無沙汰失禮仕居候處、愈御清適大慶の至に存上候。お蔭にて私も恙無く消光罷在候間、乍憚御安心被下度候。本日は明治節にて當地も珍しき快晴、澄渡りたる大空を仰ぎつゝ、遙に祖國の佳節を偲び居候。當地は既に九月の末より名物の霧に覆はれ勝にて、薄れ日の影に京の冬を思ひ出す事も有之候へども、近來は以前程濃霧の立ちこめ候事も少く相成候由ながら、此頃のごとく明かるい日の多い事は珍しと人々申居候。本年の夏は英吉利としては近來稀な暑さがつゞき、何十年來の暑さなどと新聞にも大袈裟に書立て居候を見うけ申候事も有之候。その頃、英國には氣候は無い。

今年の夏英國へ來て暑かつたからとて英國の夏は暑いと思つてはいけない。暑い事もあるし寒い事もある。暑いのが



(近附像)ントスドツラグ) ンドソロの霧

うそももなく、寒いのが特別なのでもない。暑い夏もほとんどだし、寒い夏もあたりまへだ」といふやうな言葉を英人から聞き面白く感じ申候。誠に晝浴衣を著てゐるかと思へば、夕方には羽織を重ねねばならず、その翌日は恰に羽織を重ねて爐に火を焚く事も有之候。英國の婦人は眞夏の日の外出に腕も背もあらはな薄物を身につけ居候へども、同時に日本婦

紗 紹

腑におちかねる

ころもがへ

正 餐

感受性

人が寒中にまとふやうな毛皮の衿のついた外套を携へ居候。いかに氣候の變化激しき時とても六月は絹、七八月は紗、たとへ残暑きびしくとも九月の末に白いものではといふ風に考候日本人には、眞夏に毛皮の衿巻など腑に落ちかねる話に御座候。従つて、英國婦人に「ころもがへ」といへば初夏の爽な季節を聯想するよりも、晩の「正餐」の前の著がへを聯想するが寧ろ當然かと存候。即ち「氣候が無い」といふ事實と共に、又「季節」に對する感受性の乏しさといふ事が考へられ、そこに東西文學の上に現れたる季節感に著しい相異のある所以も察知せられ候やう感じ申候。従つてまた、人間の衣類調度に現れたる季節感のみならず、自然の草花にもやゝそれに類するもの可有之は當然にて、たとへば私の著英當時、五月の末に宿の裏

ポリツヂ

オートミールなどの粥、英語。

ベーコン

「豚の煙肉」と譯す、英語。

ビフテキ

正しくはビーフステーキ、英語。

ローストビーフ

「煙肉」と譯す、英語。

初の字

柳樽所收の川柳

しゆん

庭の芝生に一輪二輪咲居候蒲公英は、七月八月になりても咲きかはり咲きかはりして、遂に十月はじめ頃まで花を見申候。又、此の事は食物に就いても同様にて、朝はポリツヂにベーコン、晩はビフテキやローストビーフなどいふ獻立が飽きもせられず春夏秋冬を通じてつゞけられ居候此の國にては、初の字が五百經が五百なり

の句の心持は遂に理解せらるべくも御座なく候。尤も、魚介類に關する味覺の鈍さは西洋諸國を通じての事のやうにて、此の程も歐洲諸國の海岸を巡歴せし水産専門の人の話に、産地による品質の良否に就いては多少云ふ者があつても、所謂「しゆん」に就いては何處の漁場の漁師達の口からも聞く事が出来なかつたとの事に御座候。それを職と致候漁師すらそ

の有様故、まして一般人士が無頓著なるは當然の事と存候。たゞ野菜や果物にはそれ程無頓著にも無之やうに候へども、日本人が蕨や松茸に感ずる季節感とは雲泥の差有之候。

かく申候へども、やはりけふ此の頃宿の近くの屋敷町めきたる路地などそゞろ歩き致候へば、鈴懸の大きな落葉のあちこちの町角などに吹寄せられてさら／＼と音を立てたる、稍傾ける板塀の上にたけ高き薄の穂の白く光れる、家の前の植込に黄菊・白菊の咲亂れたる、或は壁にはひまつはれる蔓かづらの美しくもみぢせるなど、故國の秋の偲ばれ候ものも有之候へども、初に申上候如く、陰鬱な雲霧に覆はれ候日のみ多く、しみ／＼秋を味はふ心にも成難く、秋色を探る人も殆ど見あたり不申候。尤も、これは當國のみならず、佛蘭西も獨逸もほ



鈴懸

ぼ同様に、秋といふもの無くして夏より直ちに冬に入ると見申候方むしろあたるかと存候。

此の間も電車の中に「夏期券十二月迄延期」といふ汽車の夏期割引延期の廣告を見て感じ候事ながら、大晦日まで發行するものを「夏期券」とは随分をかした話にて、日本ならば同じ割引をつゞけるにしても何とか名目をかへるはずと思はれ候事に候。麗々しく夏期券と銘打つてすましてゐる處、汗を流しながら毛皮の外套かゝへをり候處と同じく、應揚といへば應揚に候へども、移りゆく季節にもものあはれを感じ來候日本人には少しすさまじき感致され候。春は曙にはじまる四季の景物とそれに對する繊細な感受性とは、遠いこの國とこの國の人とに求め得べくも無之、枕草子冒頭の文章が生ま

麗々し
應揚

春は曙
枕草子冒頭の文
句。

立夏四月
萬葉集第十七卷、
三九八三番の大伴
家持作の歌の詞
書

れるべき國に生まれ候所以をしみる感じ申候。萬葉の末期既に「立夏四月既に累日を経れども、しかも、なほ未だ霍公鳥の喧くを聞かず。云々の詞書を見申候事の偶然ならぬを感じ申候。二三十間おき程に立てられた街燈の灯影を薄靄で包んで、なまめかしいうるほひをそへた靜かな夜の歩道を、外套の下から派手な模様の夜會服の裾長く引いた若い女が、カツカツと急ぎ足に歩み去る風情に、倫敦の冬を感じ候こそ、まづはこの國にふさはしい季節のあはれと存申候。

向寒の折柄切に御自愛專一に遊ばされ度念上候。敬具。

十一月三日

十一月三日
昭和八年(五五)

横井也有

名は時般、尾張藩士、佛文家、天明三年(四三)歿、年八十二。

莊周が夢

莊周が夢に胡蝶になつたことは其の著莊子の齊物論に出てゐる。

古今の序に

花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。

古池に

古池や蛙飛び込む水の音。(芭蕉)

翁

松尾芭蕉。
やがて死ぬ
やがて死ぬけしき

八百 蟲 譜

横井 也有

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限なるべし。それも鳴く音の愛なければ籠にくるしむ身ならぬこそ猶めてたけれ。さてこそ、莊周が夢もこの物には託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風靜まりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、この物の事、更にも誇り難し。

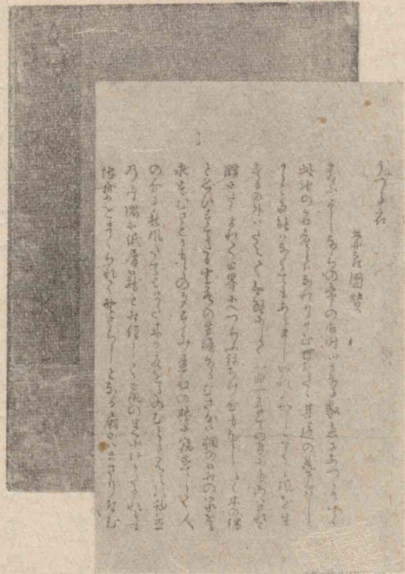
蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさがる頃は、人の汗しぼる心地す。されば、初蝶とも、初蛙かひともいふことをきかず、この者ばかり初蟬といはるるこそ大きな手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、こ

は見えず蟬の聲。
〔芭蕉〕
景物
すだく



蛸

貧の學者
晉の車胤は家が貧
しかつたので、夏
には練絹の囊に螢
を入れ、其の光に
照らして書を讀ん
だ〔晉書―車胤傳〕



本 刊 衣 鞠

ものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。
螢は、たぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛
びかひ、草にすだく。
五月の闇はたゞこの
者のためにやとまで
ぞ覺ゆる。然るに、貧
の學者にとられて、油
火の代りにせられた
るは、このものの本意
にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、殊の外の不
由なり。俳諧にはその眞似すべからず。
暑さは晝の梢に過ぎて、夕べ
蛸は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べ

蜀 魂

蜀の望帝の魂魄が
化して子規（ほと
とぎす）になつた
といふ傳説があ
る。〔寰宇記〕

ひそまる

退隱の媒

楚の龔舍は蜘蛛の
巢に蟲がかゝつて
死ぬのを見て無常
を觀じ官をやめて
退隱した。〔金樓子〕

頼 光

源氏、滿仲の子。

は草に露おく頃ならむ。つくくぼふしといふ蟬は、つくし
戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死してこのものになり
たりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも
おとるべからず。
蜘蛛は、たくみに網を結んで、ひそまつて物を害せむとす。
もろこしのむかしには、退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸
賊の心ありていと憎し。古代朝敵の初として、頼光をさへお
びやかしたる、いと恐し。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に、蟬の
羽などかけ捨てたるは、いさゝかあはれ添ふる折もあらむか。
彼はかひがひしく巢作りてこそあれ、東海道にちりぼひたる
宿なし者をば、くもとはいかていふやらむ。
芋蟲は腹だつものに譬へ、毛蟲はむつかしきひとの號とす。



蜻蛉



不物ずき

槐安の都
淳于棼が夢に大槐
安國の郡守となつ
た夢がさめて古
槐の下を尋ねて見
ると、大きな蟻の
穴があつた、それ
が槐安國であつ
た。異聞集

歐陽氏
歐陽修、支那の宋
の文學者、政治家
(西暦一〇一〇—一〇七〇)
蠅のことは「蒼蠅
ヲ憎ムノ賦」に出
てゐる。

長嘯子
木下勝俊の號、豊
臣秀吉の義甥、歌
人、慶安三年(一六五〇)卒、
一紙魚ヲ憐レム
ノ詞に出てる。

脊むししほむしは名のみにして蟲ならず。油むしといふは、蟲
にありてにくまれず、人にありて嫌はる。
蠶の生涯は世のために終り、火取蟲はたがために身をこが
すや。蜉蝣かきうははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は不物ぶぶずき
の謗となれり。おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、こ
がね蟲はいやし。

蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東
西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、
その身の安きことを得む。さるも、たよりあしきかたに穴を
營みて、千丈の隄を崩すべからず。
蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。
狗の齒に噛まるゝ蚤はたまゝにして、猿の手にさぐらる



蜈蚣

蠅螂ノ斧ヲ以テ隆
車ノ隆ヲ禦ガント
欲ス。(文選)
斧を持ちたる誇
いかつなり

原
駿河國(靜岡縣)駿
東郡。
吉原
同國(靜岡縣)富士
郡。

る虱は逃るゝこと難かるべし。
蝸牛は、たゞ水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。
家はもちたれども、行く先々を負ひ歩くは、水雲の安きにも似
ず。
蛇、蚯蚓の足なくとも歩くべくば、蜈蚣をさむしの數多きは
不用のことなり。
蠅螂の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。
人の上にもこの類はあるべし。
蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕籠
にのりて、富士を眺めゆく人には似たり。
促織はたお鈴蟲すずむしは、その音の似たるを以て名によばる。松蟲
の、その木にもよらで、いかでかく名を附けたるならむ。毛生

藻にすむ蟲

あまの刈る藻にすむ蟲の我からと音をこそななめ世をば怨みじ。藤原直子古今集

枕草子のなかに藻蟲が父を慕つて「ちよちよ」となく話がある。

卯月 長月 七賢

支那晉の世、嵇康阮籍、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎の七人が竹林に隠れて清談に耽つた。

鶉衣 十二冊、横井也有の俳文集、刊年未詳、但し前編に天明五年（三四五）の跋、續編に文政六年（二四六）の序がある。

ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし、人に疎まる。一在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生をねがひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。きりくすのつゞりさせとは、人のために夜寒ををしへ、藻にすむ蟲は我からと、たゞ、身の上をなげくらんを、蓑蟲の父よと呼ぶは、父のみ戀ひてなどかは、母を慕はざるらん。蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕べ、始めてほのかに聞きたらむ、又は、長月の頃、力なく残りたるは、寂しきかたもあり。蚊帳釣りたる家のさま、蚊遣焚く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。

鶉衣

金子元臣

東京市の人、宮内省御歌所寄人、國學院大學教授、明治元年（五三）生。

頤を解く突梯に

寸にして珍なり

無筆者御慶帳

ばかり

九川 柳 點

金子元臣

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るゝもの皆斷たれ、近づくもの皆傷つく。語句簡勁にして直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽頤を解き、或は痛快に或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變萬化、人をして應接に遑あらざらしむ。時に輕薄鄙俚なる調なきにしもあらねど、要するに、寸にして珍なるものなり。いで、左に其の二三を舉げていひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し

無筆者年賀に来て御慶帳の記名に困り、さらば來ぬ分に「して下され」といひし事、昔の笑話に見えたり。今は帳の代りに名刺受を玄關に出す。之も、あがるなといはぬばかりなり。

後の祭

曲盡す
蘇東坡

名は賦、宋代の文學者。(西曆一〇六一—一一〇一)

道灌

太田氏、名は持資、相模國(神奈川縣)の人、足利時代の武將、文明十八年(一四八六)歿、年五十五。

いそがずば

いそがずばぬれざらましを旅人の後よりはるゝ野路の村雨。

竹の子は盗まれてから番がつきよくあることなり。後の祭にもあれ何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり、訓誡ともなる。

おさへれば薄はなせばきりくす

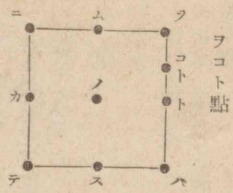
形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟渴虎ヲ取ル。」と書きしを、いみじき手がらの様に驚ける人もし此の句を見れば何とかいはん。

本降になつて出てゆく雨やどり

道灌の「いそがずば濡れざらましを」の歌と一對の巧語。急ぎてもわろし、急がてもわろし。とにかく考へ物なり。提燈が消えて座頭に手を引かれ

塙 檢校

名は保己一、國學者、文政四年(一八二二)歿、年七十六。



や

その矛盾がをかしきなり。塙檢校が「さてく、目あきは不自由な」といひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かれ

漢文に返點捨假名の左右にうるさく附纏へるさま、譬へ得て妙。昔のヲコト點ならんには「四角な文字に灸をすゑ」といはばいふべし。

手紙には狸臺には鯉を載せ

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかしさよ。近來は、中等教育を終へたる者の文章にも、この類の誤多し。あながちに此の狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくるゝ旅日記かな。食ふより外に能なき人間を罵

倒し得て痛快。

泣くくもよい方を取る形見わけ

人情の弱點を穿ち過ぎて、餘りに酷なる心地す。しかし、事

實なるをいかにせん。かの赤穂

の城渡しにお金配分を唱へし小

野九太夫は、この露骨なるものか。

かくの如く、川柳點は尋常茶飯

の出來事を捉へて、よく滑稽化す

るのみならず、又、最も眞面目なる

べき故事傳説、史實等を題目とし



柄井川柳肖像

て、その縦横自在なる口吻を弄せり。

戸隠も神樂のあひだ髭をぬき

赤穂の城渡し

假名手本忠臣藏四

段目。

小野九太夫

戯曲假名手本忠臣

藏中の人物。

口吻

戸隠明神

長野縣戸隠山に祀

る手力雄神。

當惑

なまじひに

能因

俗名桶永くわい、平安

朝中頃の歌僧、生

歿年未詳。

袋草紙

四卷、藤原清輔の

著、歌學の書。

つけ目

忠盛

平清盛の父、仁平

三年（二八三）卒、年

五十八。

隼太

源頼政の郎等猪俣

太。

盛衰記

源平盛衰記、四十

八卷、著者未詳、二

條天皇から安徳天

皇まで凡そ二十餘

年間の事實を記し

た軍記物語。

岩戸の細目に開く迄は、用のなき戸隠明神なるを思ふべし。
髭をぬくひま人の所作を、神代に附會したる働あり。

御紀行拜見に能因は當惑し

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたりしは能因なり。

天日に焦して、顔だけは黒めたれど、紀行までは手が届かずや

ありけん、物に其の沙汰なし。作者のつけ目は此處なり。但

し、袋草紙に、「二度においては實か。八十島の記を書けり。」とあ

り。何時も室内旅行家にはあらざりけらし。

忠盛の高名の場を犬がなめ

抱きとめしは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階

を飛越して、高名の場を嘗めたりといへる、滑稽突梯容易に及

び易からず。

賴政 源氏、平安朝末期の歌人、武將、治承四年(一一八四)薨、年七十七。

時致 幼名箱王丸、河津祐泰の子、建久四年(一一九三)薨、年二十。

祐成 幼名一萬、時致の兄、建久四年(一一九三)薨、年二十一。

大磯 相模國(神奈川縣)中郡。

會我物語 十二卷、著者未詳、曾我兄弟復讐の舉に取材したもの。

佐野 佐野源左衛門常世、謠曲「鉢の木」の主人公。

戸塚の阪 相模國、今の神奈川縣鎌倉郡。

越えなづむ 道風

姓は小野、書家、三蹟の一人、康保三年(一一六三)卒、年七十一。

湊合

周の武王の父。

太公望 呂尚といふ、周の文王・武王の功臣。

邂逅

波瀾

中等國語讀本 落合直文編、中學校用國語教科書刊行。

四天王

源賴光の四天王である、大江山の鬼退治に取材してゐる。

誹風柳多留

初代柄井川柳の選した川柳集、明和二年(一八二五)に第一篇が出た。

その暗さ隼太櫻に衝きあたり
盛衰記、賴政鶴を射る條に「黒雲とは見たれども、天は實に暗し。いづこを射るべしと矢所さだかならず」とあり。乃ち、郎等隼太が、左近の櫻に鼻衝きあてて、まご／＼する一場の喜劇を案出し來れるなり。作者はいかなるへうきん者ぞ。

時致は鞭をかじつて息をつぎ
兄祐成が急を救はんとて、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に駆けつけるは、曾我の物語中出色の快譚なり。これを圖にして、大根の鞭を添へたるは畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を嚙らせたるはこの作者の機轉なり。

佐野の馬戸塚の阪で二度ころび
戸塚の阪は鎌倉入の一難處。元來乘力なき源左が瘦馬、さ

ぞや越えなづみしならん。さるを、二度まで轉びたりと誇張したるに、大いなるをかしみを生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり
湊合の妙を見る。主題の蛙をいはで、突然に仕立てたるところに一種の面白味あるなり。

釣れますかなど文王そばに寄り
流石の聖人文王と奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには極めて平凡ならざるを得ず。たと「など」との語、胸に一物ある趣を狀し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

黒犬を提灯にする雪の道
四天王金剛杖でいがをむき
山伏が片寄せてふく火吹竹

(中等國語讀本)

(誹風柳多留)

藤井紫影

名は乙男、兵庫縣の人、國文學者、文學博士、京都帝國大學名譽教授、明治元年(一五二)生。

興衆

10 諺

藤井紫影

格言は賢哲の垂訓にして、俚諺は凡俗の信條なり。前者は明らかにその立言者を求め得べく、後者は興衆の聲にして、その作者を知るべからず。隨うて、その發生の時期を精確に定めんこと頗る難しと雖も、多數の俚諺中には、間々その發生の時期前後新古の關係變遷等を推測するを得べきものなきにしもあらず。

吾人が座談・演說等に日常使用する多數の諺は、吾人の祖先より知識的・道徳的遺産の一部分として繼承せるものにして、吾人が新に製作したるものにあらず。有史以來、世々の人類が、内外諸種の天然人事に遭遇し、物に觸れ事に感じ、或は觀察

非運

アリストテレス

ギリシヤの大哲學者、西曆前三二二年歿、年六十三。

トレンチ

アイerlandの宗教家、言語學者、詩人、西曆一八八六年歿、年八十。

し、或は考慮し、或は感激し、喜怒哀樂種々雜多の經驗を積み、人生に普通なる知識を感得して、後世子孫に遺せるもの、これ即ち今日行はるゝ諺の多數なり。「手輕にして受用し易きが爲に、滅亡の非運を免れし古知識の斷片なり。」とは、二千年の昔、俚諺研究の率先者アリストテレスすでにこれをいへり。トレンチは、その俗諺論に於て、「今日文明諸國の共有財産とも稱すべき諺は、各國民が祖先傳來の遺産にして、或は口々に語り繼ぎ、或は前代の記者によりて後世に書傳へられて、希臘拉典の古きより中世の諺に至る迄、依然として今日に存し、諸國に行はる。されば、近き世に起りたる諺ならんと一般に信ぜらるゝものにして、その淵源の極めて悠久なるを發見すること少からず。」といへり。現今行はるゝ我が國の諺にも、其の發生

萬葉集

二十卷、我が國最古の歌集、仁徳天皇の元年より淳仁天皇の天平寶字三年迄凡そ四百九十六年間の歌を集めたもの。

枕草子

清少納言の隨筆。

土佐日記

紀貫之が土佐守の任果て京に歸る途の日記。

載籍
徴す

時代のすこぶるとほきものあり。「切創に鹽」「重荷に小づけ」のごときは、既に萬葉集に見え、「二升耕に二升は入らぬ」といふは、枕草子に出て、死ぬる子みめよし。「飯粒て鯛釣る」といふは、ともに早く土佐日記に見えたり。此等がいづれも千年内外の歴史を有するものならんとは、この諺を口にする人々のなべて豫想せざる所なるべく、今日にては既に載籍の徴すべきものなしと雖も、その淵源の遠きこと、前數者に相譲らざるもの尙多かるべし。降りて鎌倉時代より室町時代に及べば、現代のものと同なる諺の數、次第に多くなりゆくは固よりいふまでもなき事にて、鎌倉室町時代の載籍を通讀せし者の容易に認め得る所なり。

祖先傳來の他に、外國より輸入せられたる諺あり。時とし

屹峙す

内外典

將來

眼に一丁字なし

流布す

合はせもの

會者定離

ては、彼我相交換して、雙方同時に行はるゝより、孰れが借主にして孰れが貸主なるか、容易に判別し難きもの亦少からず。四面海を環らし、東海に屹峙せる我が國は、歐洲諸國の如く他國との交通自由ならず、人種言語の關係も亦彼の如くならざるより、他國と諺を貸借交換して、その本主の誰なるかを判ずるに苦しむが如き患少しと雖も、支那朝鮮との交通夙に開け、儒佛の教深く民俗に染みしより、内外典より來れる諺甚だ多く、一見して外國將來たるを認むべき者の他に、衣服外觀は純然たる國風ながら、尙その正體は儒佛にあらずやと疑はるゝもの往々之あり。殊に僧徒は、布教の必要上、經文中の金言を俗譯して、眼に一丁字なき善男善女を教化するより、その傳播極めて早く、汎く諺として世上に流布するに至る。「合はせも

仰向きて
 惡人賢者ヲ害セン
 ト欲シテ、仰イデ
 唾ス。(四十二章經)
 蛙の面に水
 蛙ノ面ノ水、鹿ノ
 角ノ蜂。(普灯錄)
 渴すれども
 渴スレドモ、盜泉ノ
 水ヲ飲マズ。(陸機
 の詩)
 麒麟も
 麒麟ノ衰フルヤ、
 駑馬之ニ先ンズ。
 (戰國策)
 麻につるゝ蓬
 蓬、麻中ニ生ズレ
 シ。(荀子)
 井の中の蛙
 井蛙以テ海ヲ語ル
 ベカラズ。(莊子)
 情に刃向かふ刃な
 し
 仁者敵無シ。(孟子)
 信偏なる
 胚胎す

のは離れもの。「仰向きて唾はく。」「蛙の面に水。」「鹿の角を蜂
 が螫す」の如き、巧みに日本化せられたり。「渴すれども盜泉の
 水を飲まず。」「麒麟も老いては駑馬に劣る。」の類は、何人も一見
 して國産に非ざるを知るべきも、「麻につるゝ蓬。」「井の中の蛙。」
 「情に刃向かふ刃なし。」のごとき、極めて通俗にして平易なるも
 のが、信偏なる儒教の語に胚胎せしものとは誰か思ふべき。
 「壁に耳。」といふも古き諺なれど、既に詩經に「君子易ク言ヲ由フ
 ル無カレ、耳垣ニ屬ス。」の語あり。拉典にも同一の諺ありて、そ
 れより汎く今日の歐洲諸國に分布せり。
 維新後、西洋諸國との交通盛にして、外國語を學ぶ者多きに
 隨ひ、外國の諺の輸入せられしものまた之あり。「時は金」、「習
 慣は第二の天性」、「二兎を追ふ者は一兎をも獲ず。」などの類即

詩經

五經の一、殷代よ
 り春秋時代までの
 詩三百十一篇を孔
 子が編んだもの。

ち之なり。なほ又、人の社會に立つや、生活上絶えず新經驗に
 遭遇し、知識上に道德上にあらたなる自家の確信を生ずるや、
 その經驗的所見を發表するに一種の文句を以てす。而して、
 その文句にして幸に諺たり得べき資格を具備する時は、一般
 國民の贊同を博し、遂に諺として成立すべき權利を享有する
 に至る。

一國の俚諺は、生々蕃殖して窮期なきと共に、一方舊く行は
 れて既に國民の記憶を去りたるものはた少からず。此の如
 く、舊を忘れ新を迎へて、俚諺は時代と共に増減變遷するもの
 なり。

古來の典籍、殊にその通俗的なるものは、幾多の諺をその中
 に採録含蓄するのみならず、書中の佳句妙章は、往々世人に裁

斷割取せられて、恰も本来の諺なるかの如く使用せられ、時として、漸次その語句を變更して、諺としての使用に便利ならしむる餘り、一見その出所を辨知し難きまで相貌を變ずるに至る事あり。和歌俳諧川柳俗歌の類は、その形體短小にして、引用にも記憶にも便利なるを以て、諺の如く使用せらるゝもの多し。和歌より來れるものは、例へば、

世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬にな

世の中は
古今集所收、よみ
人知らず。

る
さびしさに宿を立出てながむればいづくも同じ秋の

さびしさに
後拾遺集所收、良
暹法師の作。

夕暮

底ひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそあだ波は

底ひなき
古今集所收、素性
法師の作。

たて

山川の
空也上人繪詞傳。

山川の末に流るゝ椽がらもみをすててこそ浮かむ瀬
もあれ

思ふこと

後水尾天皇の御製
といひ傳ふ。

思ふこと一つ叶へば又二つ三つ四ついつもむつかし
の世や

附句

室町時代の人、連
歌に巧みてあつ
た。一條良基の師。

の如き、俳諧の附句及び俳句川柳より來れるものは、例へば、
草の名も所によりてかはるなり浪花の蘆は伊勢の濱

芭蕉

二三頁頭註参照。

荻
救濟

物いへば唇寒し秋の風

芭蕉

雪の日やあれも人の子樽拾ひ

冠里

百なりや蔓一すぢの心より

千代

世の中は三日見ぬ間の櫻かな

蓼太

の如きものこれなり。

千代
二五頁頭註参照。

冠里

安藤對馬守信友の
號、備中國(岡山
縣)松山の藩主、信
博の子、吉宗に仕
へて老中となる。
享保十七年(三三三)
卒、年六十一。

人口に膾炙す

王彦章

支那五代梁の人、
武人

歴山大王

マケドニヤ王フィ
リップの子、若く
して即位し、遠近
を攻略して、ギリ
シヤ文化を東方に
普及した。(西暦前
三五—前三三)

家康

徳川第一代の將
軍、元和二年(三三
〇)薨、年七十五。

定家

藤原俊成の子、歌
人、仁治二年(二〇
二)薨、年八十。

揆

訓誡の意を含み、又は、道義上の譬喩に供すべき詩歌、俳句が諺として用ひらるゝのみならず、偉人名士の語は、直ちに當時の人口に膾炙し、永く後世に傳誦せられて、俗諺と伍を同じうするに至る。孔孟釋迦などの金言の如きは、いふもさらなり。王彦章が「豹ハ死シテ皮ヲ留メ、人ハ死シテ名ヲ留ム。」といひ、歴山大王が波斯の大軍來り襲はんとするを聞き、自若として、「一屠兒、千羊を恐れず。」といひ、家康が五字七字の戒、うへをみな。みのほどをしれ。の如き、一度これ等偉人傑士の口頭を出づれば、千萬人の間に傳誦通用せられ、ながく世の諺となりて滅びず。定家が「和歌に師匠なし。」と教へ、芭蕉が之に倣ひて、「俳諧に古人なし。」と唱へたるが如き、前數者に比して適用の範圍稍狭しと雖も、名人の一語、世上の諺となるに至つては、其の揆一のみ。

世故

標置す

緣由

出自
喧鬧
十字街頭

諺は通俗をむねとすれども、必ずしも凡庸俗流の口にもみ出づと斷ずべからず。寧ろ、世故に長け、機智に富み、才識時俗を抜くこと一頭地なる者にして、始めて痛切警拔なる人生の批評、諷刺を擅にし得べきを記憶せざるべからず。「武士は食はねど高楊枝。」花は櫻木、人は武士。と、高く標置し、「馬方船頭お乳の人。」商人の空誓文。と、罵倒したるがごとき、その立言者の地位如何を察するに難からざるなり。詩歌格言等より來れる諺は、その發生の緣由一目瞭然たれども、此の如きは、無數の俚諺中極めて小部分にして、その大多數は、何時如何にして生ぜしか、生誕の時日も、出自の父母も、漠として知るべからざること、恰も車馬喧鬧の十字街頭に置去りにせられたる棄兒のみ。

愛敬
機轉利く
重寶がる

話柄
附會す

諺の研究

藤井乙男著、諺の
發生・傳播等に就
いての研究、明治
三十九年(三五六五
月)俗諺論として
刊行、昭和四年(三五
八)六月改版刊行。

如し。幸にして、この兒愛敬ありて人なつこく、機轉利きたるより衆人の愛顧を得、餓えず凍えず、無事に成長して世間に重寶がらるれども、人も我もその來歴如何を知る能はざるは、依然として少しもありし昔に異ならざるなり。されば、諺の起源として世に傳へらるゝ話柄は、信據すべきもの極めて少く、諺の起源といはんよりは、寧ろ諺の爲に後日想像附會せしにあらざやと疑はるゝもの十の七八なり。さるを、強ひて之が起源を求めんとするは、猶棄子の系圖を作るが如く、所謂骨折損の草臥れ儲けたる事多かるべし。

(「諺の研究」に據る)

坪内逍遙

名は雄藏、岐阜縣
の人、文學者、文學
博士、早稻田大學
名譽教授、昭和十
七年(三五九七)年七
十七。

いなのみ

長柄堤
大阪府東淀川區豐
崎町附近の淀川の
堤



片桐且元

豐臣秀吉・秀頼の
臣、元和元年(三二
七)西歿、年六十。
茨木
大阪府三島郡茨木
町

二 長柄堤の訣別

坪内 逍遙

晨鷄再び鳴いて残月薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。
はや分かれゆく横雲や、残りの星を一つづつ、鐘が消し行く
いなための、長柄堤に秋闌けて、一叢蘆に風黒く、有明凄き淀
川水、逝きて歸らぬ浪の音、狭霧に咽び白けゆく、千草が蔭の
蟲の聲、哀はいとまさららん。片桐市正且元は居城茨木
へ立退かんと、從ふ郎黨一百餘人、丑の刻に邸を立つて、大阪
城をあとになし、列を正してしづくと、長柄堤に差懸る。
寂然として駒立つる、長柄堤の有明がた、時に囀る小鳥の聲、
川霧やうく、晴れゆけば、遠樹模糊として幹を分かちほの
見え渡る賤が屋に、一筋騰る朝煙、くだかけの聲、勇ましく、生

くだけけ

南山不落
大阪城

大阪城の築かれたのは天正十一年三二四三である。

故殿下

豊臣秀吉のこと、秀吉の薨去は慶長三年(三五〇)で、享年六十三。



(演上座京東月一年七十三治明・付番葉一桐) 別 訣 の 堤 柄 長

氣溢るゝ東の空には似ぬやいる
方の、月すさまじき柳蔭枯葉枝疎
らにして風飄々、見る目も昏しを
ちかたに、おぼろくと現るゝ名
におほ坂の四衢八街、悄然として
淋しげに、一棟高く聳えしは、

市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。
南山不落と祝はせられ、千萬年の後
までもと、築かせられし大阪城故殿
下薨れさせたまひて後、まだ程もな
きに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ離
れ、取りわけ加藤肥州逝去の後は、思

加藤肥州

加藤清正、肥後國(熊本縣)熊本の城主、慶長十六年(三二七)歿、年五十五。

阿附黨同す

大政所の御方、高臺院のことか、秀頼の嫡母、秀吉の正室、寛永元年(三二四)卒。

脣齒已に亡ぶ

金城湯池

須彌

梵語で妙高・妙光と譯す、佛教に於て、世界の中心に屹立するといふ高山。

鶻の嘴とくひちが

千姫君

徳川秀忠の女、秀頼の室となる。

毘盧舍那佛

大日如來の事。

前門の虎

陣俘僞の「史斷」の句。

慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬪げば、大政所の御方さへ、當家を餘所にみそなはし、浮世離れし御有様、脣齒已に亡ぶ。今にもあれ、事起らば、金城湯池も其の甲斐なく、

いひかけて聲曇らせ、

市「須彌より重き御遺命、夢聊かもわすれざれど、御運の末か情なや、此の且元のすること爲すこと、鶻の嘴とくひちがひ、兩家を繋ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか。『お家とこしなへに康かれ。』と、祝ひし文字が本となり、降つて湧いたる難題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたること、御運の末といひながら、」

姑息因循す

恠へず馬よりとび下り、彼方に向かひ平伏なし、市「これしかしながら、不肖且元愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の畏に罹り、仰せつけられし御遺命に、背き奉る今日の仕合はせ、不忠とも言ひ甲斐なしとも思し召さん。それを思へば、且元が此の腸はちぎるゝばかり。償ひ難き不臣の罪は、あの世で御詫仕らん。お赦しなされて下さりませ。」

在すが如く両手をつき、人目なければやゝしばし、不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

市「あゝ、われながら不覺のいたり。我が大罪の御詫よりも、差懸るお家の安危。長門守には如何にせし、心もとなきことどもぢやなあ。」

長門守

木村長門守重成、重茲の子、秀頼の臣、元和元年(三七)西戦死、年二十一。

すかしながむる折こそあれ、遙に聞ゆる蹄の音程もあらせず、只一騎、淺霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る、木村長門守重成、

長「市正殿に候な。」

市「長門殿、待ちかねしぞ。」

いふ間にか、け寄るくつわづら、右手におり立ち顔見合はせ、言葉はなくてそゞろにも、まづ袖濡るゝ朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入るかたの月、ゆらめきて、老いゆく秋の淋しさを、長柄堤に留むらん。

長「最早豊臣の御社稷も、愈々末となつたるか。棟梁と頼む足下まで、佞人讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるるとは。某圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、

社稷

御母公

淀君をさす。

織田入道

織田信雄常眞入道、寛永七年(三三〇)歿、年七十三。

大野

大野治長、修理大夫、秀吉・秀頼の臣、元和元年(三三三)歿。

渡邊

渡邊糺。

いしくも

鼠輩

出仕を遠慮の其の間に、思ひ懸けぬ珍變あり。續いて足下に御討手と昨朝承り、大いに驚きすぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿日頃に似氣なく激論の末、席を蹴立て只今退座ありしとばかり。後は亂脈無法の評定、御母公の威を笠に被る大野渡邊等が我意暴慢。此の上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の柄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を思ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざりし言ひ甲斐なご。

悔むを且元押宥め、

市「いしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢申しし如く、お家の大仇は彼等にあらざ。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲

治定

うたかた

にはあらず。某とても此の度の一條、遺恨骨髓に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至、大切なるはお家の後事、某退去のこと關東に聞えなば、破綻生ぜんこと治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。大亂破裂せんは目前なり。この上は只偏に籠城の計畫こそ肝要なれ。」

長「して、籠城の計畫とは何を以て先とすべきか。」

市「されば今御城に兵糧金銀は乏しからず。まつた、猛將勇卒にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし置きたり。」

長「して、其の智謀の將とは。」

九度山

和歌山縣伊都郡、高野山北谷の山村。



上田

信濃國(長野縣)小縣郡

眞田安房守

名は昌幸、慶長十三年三月、歿、年六十五

關ヶ原の一戦

慶長五年(三〇〇)九月、石田三成等徳川家康と天下を争つた戦。

螫す

長曾我部盛親、元親の第四子、慶長十九年三月、歿、年未詳

市「いま九度山に隠れ忍ぶ、信州上田前の城主、眞田安房守が二男左衛門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、關ヶ原の一戦以來、關東の跋扈を怒り、螫して世の様を窺へるを、先年お味方となし置いたり。事起らば上使を以て急ぎかれを招かるべし。合戦の進退は一切彼の人に任せられよ。其の他關ヶ原の一亂以後、浪々なしし長曾我部盛親、まつた黒田家の浪人後藤又兵衛基次、何れも得易からぬ良將なるが、豫て因みはつけ置きたり。上、御使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜん。これ第一の手配なり。」
長「して又、籠城となつたる曉、敵を防がん手配は。」
市「その儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀

後藤又兵衛基次

秀頼の臣、元和元年(二二五)歿、年未詳。

出丸

紀州川

紀の川、吉野川の下流

浪華津

今の大阪

船入

州の山々より材木數多伐出させ、商業の爲といつはり、紀州川の川上より浪華津におし流させ、御船入に積置いたり。まつた、港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に互るとも、なほ支ふるに餘あるべし。
長「それに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年お出費嵩むと雖も、尙若干の餘財あり。」
市「甲冑・兵具も乏しからず。」
長「城は名に負ふ南山不落。」
市「眞田後藤の智勇をもつて、此の堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば、」
長「たとひ關東の老奸雄、利を啗はせ、諸大名を懷け、六十餘州の

速水

名は守久、秀頼守護の七隊長の一。

御宿

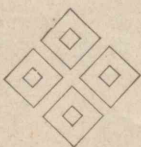
名は正倫、元は武田氏の臣、後北條氏に仕ふ。

和久

名は宗是、秀吉の書佐。

祖先佐々木

源三秀義の孫、近江守信綱、四つ目結



頼しし頼し

兵をつくし、四方八面より攻寄すとも、

市「中々三年四年がほどに攻落さんこと難かるべし。」

長「まつた、若年には候へども、愈軍始りなば、われ亦一方を承り、

速水御宿和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとよ

り鴻毛の、吹飜さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣將士心

を一にし、千變萬化の手を盡くさば、金石も亦透りぬべし。利

慾に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に

従ひ、このこと君に言上なし、直ちに、軍の手配せん。御心安か

れ、市正どの。」

市「ほ、頼しし、頼しし。只大切は上下の一致、必ず忠勤はげま

れよ。とはいひながら、往時に照らし、成り行く末をかんがみ

れば、

社鼠

長「淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野渡邊。」

市「上、御發明に渡らせらるれど、」

長「讒佞これを蔽ふがゆゑ、」

市「地の利はあれども人の和なく、」

長「故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打伏しし六十餘州の民草

も、」

市「天の時にや、大御所のおのづからなる徳風に、いつしか靡く

世の有様。」

長「如何なれば、かく迄に御運かたぶく西天の、」

市「有明の影薄れつゝ、」

長「東天紅と八面に、かしましく鳴くくだかけは、」

市「新日東天に昇るといふ、」

大御所
徳川家康

藥

桐一葉

坪内逍遙著、豊臣家遺託の重任を負うた片桐且元を主人公とした悲劇。

長「世の成行の、
二人「影なるか。」

是非もなき世の有様と、入る方の月眺め入り、しばしは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのくくと明けにけり。惜しきが中の生別離、まことやこれに比ぶれば、藥は蜜にや似たるらん。右と左に立別れ、駒引寄せて式代や。

二人「さらばく。」

と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇る、おぼろく。嘶く駒の聲はして、立別れゆく兩人が、此の世に残す面影は、また見ぬ形とぞなりにける。

(桐一葉)

吉澤義則

京都市の人、國語國文學者、文學博士、京都帝國大學名譽教授、明治九年(一九〇二)生。

三 口語と文語

吉澤 義 則

われらの文章に口語文と文語文とあることと、われらの言葉に口語と文語とあることとは誰知らぬ者はあるまい。それでは一體口語とはどんなものか、また、文語とはどんなものか、といふ事になると問題はむづかしくなる。嚴密に言へば、われらが日常談話に用ひる言葉、即ち、普通に口で話す言葉が口語であり、これに對して文章に書きあらはされた言葉が文語である。

ひところ言文一致といふ事が盛に唱へられた。それは日常の口語で、文章を書かうとしたもので、その主張が世に容れられて、現在の所謂口語文は發達したのである。けれども、よ

ひところ
言文一致

地

く考へて見ると、文語と口語とが全く一致するといふ事があり得るであらうか。日常の談話をそのまゝ文字に寫したら一致するではないかといふかも知れない。けれども、考へると、そんなものが文章として讀むに堪へるかどうか。小説などにあらはれた會話の文章も、勿論、日常の談話そのまゝではない。まして地の文が日常の談話そのまゝでないことはいふまでもあるまい。

それでは、口語と口語文の語とどう違ふか。まづ第一に後者は彫琢を経てゐるといふことを注意しなければならぬ。一見、口語そのまゝのやうであつても、やはり磨かれてゐる、引締められてゐる。例へば、口語は音聲の性質上、表現されるとそのまゝどん／＼消去つてしまふものであるから、重複があ

彫琢

卑語

つても、形のくづれた方言卑語があつても、あまり邪魔にならないけれども、文章となると、一度寫された文字はいつまでも消えてゆかないから、不必要な重複や方言卑語がまじつてゐると目障になるゆゑ、さういふことのないやうにと努力する。かうして、口語文の用語は、彫琢された口語とはいへようが、口語とまつたく一致したとはいはれないのである。

右は一語々々としての相違に就いていつたのであるが、その一語々々を結合して文章を綴る場合に於ても、文語は口語よりも遙に複雑な構造が用ひられてゐる。これも主としてその表現機關たる音聲と文字との性質に起因するもので、文字で書かれた文章は何度でも見返す事が出来るといふ便宜を持つてゐるから、多少構造は複雑であつても理解を妨げな

い故である。

尤も、會話の際と、大勢の人に向かつてする挨拶とか、演説、講演などいふ際は、自ら相違があつても、一般に話しかける場合の言葉は文語的な色彩を帯びてくるものであるから、口語といつたところで、一概にいつてしまふ事は出来ないが、大體さうした傾向のあることは拒むことの出来ない事實である。さて、文章はその初においては口語を本とする筈である。

それゆゑ、平安朝時代に出來た物語などは、當時の口語を本として書かれたものと考へられる。土佐日記に、舟とく漕げ、日のよきに、と、うながしたところが、楫取が舟子どもに、「み舟よりおほせたぶなり、朝北の出てこぬさきに綱手はやひけ」といつた。これは楫取の自然の言葉であるが、それを聞いた人があ

平安朝時代

平安奠都(四五四)から
平安氏滅亡(八四三)か
までの約四百年
間。
土佐日記
五八頁参照。

源氏物語

紫式部著、五十四
卷、宮廷生活を中
心としての平安世
相を描寫した長篇
小説、大體長保、寛
弘年間(一五九—一六
七)に成つたもの
らしい。

やしく歌めきてもいひつるかな」といつて書いて出したのを見ると、成程三十一文字の歌になつてゐた、といふ話があつて、當時の口語と文語との關係を推測しうるものとして有名になつてゐる。けれども、その當時の文章は、當時の口語を本としてはあるが、それを彫琢したものであることはいふまでもない。そこに口語とは幾らかの距離があることになるが、この距離は年を経て大きくなる傾向を持つものである。何故かといふに、口語はその時々消えてしまふものであつて、變化し易い性質がある。それに對して、文章に書かれたものはいつまでも残り、型といふものが出來易く、變化し難い性質がある。ことに源氏物語のやうな大作が出て人々の尊敬を受けることになる、その美しい文章は人々の手本となつて愈

江戸時代

徳川時代、徳川家
康が慶長八年(三三六)
三幕府を江戸に開
いてから、慶應三
年(三五七)の瓦解に
至るまで、二百六
十五年間をさす。

擬古文

奈良朝時代

元明・元正・聖武・
孝謙・淳仁・稱徳・
光仁の諸天皇の御
七代七十餘年間、
奈良に都せられた
時代(三七〇—七一〇)。

今昔物語

三十一卷、一名宇
治大納言物語、源
隆國の編著、説話
集。

保元物語

三卷、著者未詳、
保元の亂の顛末を
記した軍記物語。

平治物語

三卷、著者未詳、
平治の亂の顛末を
記した軍記物語。

齋藤實盛

武將、平宗盛の臣、
壽永二年(八四三)戰
死、年七十三。

平維盛

武將、重盛の長子、
永曆元年(二八三〇)
生、屋島の役後高
野山に入つて僧と
なつたといふ、時
に年二十五。

定の者

したゝかなり

變化し難くなる。かうして、文語と口語との距離は益々大きくなり、遂には全く別物といふやうにまでなつてしまふのである。江戸時代の國學者は當時の口語とは全く違つてゐる平安朝時代の文を理想とし、之を摸して自分達の思想を發表した。世にこれを擬古文といふ。

さて、平安朝時代の物語の文は、當時の口語を本としたものとはいへ、その口語は宮廷に仕へてゐる女子の言葉であつたと考へられる。男子は奈良朝時代から漢文を書くのが普通であつた。土佐日記は男の書いたものであるが、はじめに、男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり。

とあつて、女の書いたものといふことにしてある。であるか

ら、平安朝時代の物語が、もし男子の言葉を本として書かれたなら、今見るやうなものとは違つた調子のもので出來たに違ひない。後のものではあるが、今昔物語保元物語平治物語平家物語等は男子のものとして發達した文章である。

今でもなほ書簡などに用ひられる候文もやはり男子のそれである。この「候」といふ言葉も勿論口語に行はれてゐたもので、平家物語には齋藤實盛が大將軍平維盛の間に答へた言葉を次の如く寫してゐる。

さ候へば君は實盛を大矢とおぼしめされ候にこそ。わづか十三束をこそ仕り候へ。實盛ほど射候ふ者は八箇國にはいくらも候。大矢と申す定の者の十五束に劣つて引くは候はず。弓の強さもしたゝかなる者の五六人

領
かけず

して張り候。かやうの精兵どもが射候へば、鎧の二三領はたやすうかけず射通し候。

この「候」が對話の代用であり、對話に近い事情にある書簡文の中に用ひられ、文語として固定したのが現在の候文である。

さて、前述の擬古文もこの候文も皆文語文であるのであるが、今日一般に文語文といふ時には、江戸時代の漢文訓讀の影響を受けて明治時代に發達した文章を指すのである。これはきびくした物いひの強さが稱へられたものであつたが、これは口語が固定したものではなく、その本となる漢文の訓讀が既に當時の口語ではなかつたのである。それは戦記文などと通ふ點もあるが、「ぞ」「こそ」等の係詞を用ひず、敬語も餘り用ひない読み方で、要するに、江戸時代の漢學者に作り出さ

訓讀

きびくする

機運
葛藤
風靡する

れた一種の文語であつたと言はれよう。

かうして、平安朝末に文語が固定し始めてから、種々の文が行はれたが、文學として見るべきものには當代の口語を本とした文といふものは殆ど見られなかつた。明治二十年代から動き始めた言文一致更生の機運が、非常な苦悶と葛藤の末、遂に文章界を風靡するに至つたのは極めて最近のことに屬する。日々に變つて行く口語に對して、この口語文がいつ迄もその姿を保つてゆくならば、やがて新しい言文一致文の要求が起つて、現在の口語文が文語文といはれる時が來なければならぬと思ふ。

(証新日本讀本)

証新日本讀本
吉澤義則編、中學
校用國語教科書、
昭和九年(三五九)十
月刊行。

藤原雅經
歌人、承久三年（
八二卒、年六十二）

藤原良經

歌人、建永元年（
八二卒、年三十八）

掃衣の心を
みよし野の山の秋かぜさ夜ふけてふるさと寒く衣う
つなり (同右)

藤原雅經

和歌所の歌合に、關路秋風といふことを 藤原良經

人住まぬ不破のせき屋の板びさし荒れにしのはた
だ秋の風 (新古今和歌集)

百首の歌の中に 藤原良經

霜さゆる山田のくろのむらすすき刈る人なしに残る
ころかな (同右)

眺望の心を 藤原良經

和歌のうらを松の葉ごしにながむれば木末によする

藤原良經

藤原氏、兼實の弟、
良經の叔父、天台
座主大僧正、歌人、
嘉祿元年（八五
寂、年七十九）

慈圓

寂蓮

俗名藤原定長、俊
成の甥、歌人、建仁
二年（六一三寂）

和歌のうら

和歌山縣海南市海
岸一帯の地で、風
光が佳い。

鴨の社

賀茂神社を申す。

鴨長明

通稱菊太夫、賀茂
神社の禰宜の家に
生まれた、歌人、
管絃の道にも通じ
た。後日野山に閑
居し、建保四年（二
六寂、年六十四）

石川やせみの小川の清ければ月もながれを尋ねてぞ
すむ (同右)

鴨長明

石川やせみの小川

賀茂川をいふ。

藤原秀能

歌人、仁治元年（二
九〇寂、年五十七）

難波江
現在の大阪市及び
その附近の古稱。

藤原秀能

夕月夜しほみちくらし難波江の葦の若葉を越ゆるし
らなみ (同右)

百首の歌奉りし時、春の歌

山ふかみ春とも知らぬ松の戸にたえだえかかる雪の

式子内親王

式子内親王

後白河天皇第三皇
女、和歌に長ぜら
れた、建仁元年（二
六一）薨御、御年未詳。

宮内卿

後鳥羽天皇の官女、右京大夫師光の女、和歌に長ず。

千五百番歌合

建仁元年(一一二二)、後鳥羽天皇以下三十人の歌人各百首を詠じ、都合千五百番の歌合をなし、たもの、仙洞百番歌合とも云ふ。

藤原俊成女

出家して越部禪尼といふ、俊成の養女、實父は藤原隆信、實母は俊成の後妻親忠女、建長六年(一一四四)歿、年八十餘。

源實朝

鎌倉幕府第三代の將軍、異彩ある歌人、承久元年(一一七九)公曉に殺された、年二十八。

金槐和歌集

一卷、實朝の歌集、鎌倉右大臣家集ともいふ、金は鎌倉の鎌の扇、槐は大匠たることより起る。

藤原爲兼

玉葉和歌集の撰者、元弘二年(一一九二)薨、年七十九。

玉葉和歌集

二十卷、伏見上皇の院宣を奉じて、藤原爲兼の撰したるもの、正和元年(一一九一)成る。

永福門院

伏見天皇の后、歌人、藤原實兼の女。

風雅和歌集

二十卷、花園法皇御自撰、正平元年(一一九一)成る。

玉水 (同右)

千五百番歌合に、春の歌

宮内卿

うすくこき野べのみどりの若草にあとまで見ゆる雪のむらぎえ (同右)

千五百番歌合に

藤原俊成女

風かよふ寝ざめの袖の花の香にかをるまくらの春の夜の夢 (新古今和歌集)

源實朝

箱根の山をうち出でて見れば浪よる小島あり、供の者にこの浦の名は知るやと尋ねしかば、伊豆の海となん申すと答へ侍りしを聞きて

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に浪のよる見ゆ (金槐和歌集)

あら磯に浪のよるを見てよめる

大海の磯もとどろによする波われてくだけてさけて散るかも (同右)

夏歌の中に

藤原爲兼

枝にもる朝日の影のすくなきにすずしさふかき竹のおくかな (玉葉和歌集)

夕花を

永福門院

花の上にしばし映るふたづく日入るともなしに影消えにけり (風雅和歌集)

後醍醐天皇

第九十六代の天皇
御名尊治、延元四年(一九九)崩御、御年五十二。

新葉集

二十卷、宗良親王御撰、弘和元年(三〇四)成る、勅撰集に準ずべきもの。

後村上天皇

第九十七代の天皇、御名義良、正平二十三年(三〇六)崩御、御年四十一。

土佐國

高知縣、尊良親王は北條高時の爲に土佐に遷され給うた。

尊良親王

後醍醐天皇の皇子、延元二年(一九九)薨御、御年二十七。

宗良親王

後醍醐天皇の皇子、天台座主にて尊澄法親王と申上げた、後還俗せらる。新葉和歌集の御撰者、元中二年(三〇五)薨御、御年七十餘。

藤原師賢

花山院師賢、大納言、元弘二年(一九九)薨、年三十二。

後醍醐天皇

吉野の行宮にてよませ給うける御歌の中に

臥し侘びぬ霜寒き夜の牀は荒れて袖に烈しき山おろしの風 (新葉集)

後村上天皇

百首歌よませ給うける中に

仕ふべき人や残ると山深み松の戸ざしもなほぞ尋ねむ (同右)

尊良親王

土佐國にて百首歌よみ侍りける中に、冬月

わが庵は土佐の山風互ゆる夜に軒もる月もかげ凍るなり (同右)

宗良親王

あづまの方に久しく侍りて、ひたすらもののふの道にのみたづさはりつつ、征東將軍の宣旨など下されしも、思ひの外なるやうに覺えて、よみ侍りし

思ひきや手も觸れざりし梓弓おきふし我が身馴れむものとは (新葉集)

藤原師賢

同じ頃(元弘元年八月)の事にやありけむ、ある野原の中にて夜を明かしけるに、秋の末つ方なれば、蟲の聲々きほひ鳴くを聞きて、思ひつづけ侍りける

いにしへは露分けわびし蟲の音をたづねぬ草の枕にぞ聞く (同右)

川路柳虹
名は誠、東京市の
人、詩人、明治二
十一年(五四)生。

一四 笑

聲

川路柳虹

なんといふ生だ。

なんといふ生きくしさだ。

母の腕に抱かれた

嬰兒の充ち満ちた笑よ。

母はそのかゝへた手に

波うつた笑をかゝへる。

全世界にひゞく幸福を

その笑聲にきくのだ。

朝の日は向かふの屋根を飛びこえて

一めんに母の顔にあたる、髪にあたる。

嬰兒の頭にあたる。

その笑は金色をなして波うつ、

母にも、嬰兒にも、

そして、それを見る自分にも。

竹田出雲

名は清定、淨瑠璃作者、寶曆六年三
四、歿、年六十六。
芹生の里
今京都府愛宕郡大
原の西方の地の古
稱。

武部源藏

道真から筆道の秘
傳を傳授されてゐ
る。

藤原時平

時平を脚色した人
物。

松王丸

道真の愛樹、梅、松
櫻の手入をする老
農白太夫の、三人
息子（梅王丸、松王
丸、櫻丸）の一人。

一五寺子屋

竹田出雲

菅原道真の一子菅秀才は、道真の舊臣で寺子屋師匠の武部源藏夫婦が我が子に装ひ、芹生の里に匿つて居たが、露顯する。藤原時平の家來春藤玄蕃と松王丸とは、源藏を呼出し、菅秀才の首引渡しを命じる。その留守中、一人の女房が小太郎といふ七歳の兒を連れて來て寺入を頼み、自分は隣村に用事があると言つて立去る。源藏は、菅秀才の首を渡すと約束して歸途につくが、途々苦慮するが、歸つて見て、小太郎が菅秀才に似てゐるのを幸ひ、突嗟の思案、之を身代りにして一時を遁れようと腹をきめた。

かゝる所へ春藤玄蕃、首見る役は松王丸、病苦を助くる駕乗物、門口に昇据うれば、後には大勢村の者、付き隨うて、申し上げます。皆是にをる者の子供が、手習に參つてをります。若し

失せう（失せよう）

菅丞相
菅原道真
ぐる
手
くりよ（くれよう）

取違へ首討たれては、取返しがりませぬ。どうぞお戻し下され。」と願へば、玄蕃「やあ、かましい蠅蟲めら。うぬらが餓鬼のことまで、身共が知つた事か。勝手次第に連失せう。」と、呵りつくれば、松王丸「やれお待ちなされ、暫く。」と、駕より出づるも、刀を杖、憚りながら彼等とても油斷はならぬ。病中ながら拙者が、めが檢分の役勤むるも、外に菅秀才の顔見知りし者なき故、今日の役目しおほすれば、病身の願お暇下さるべしと、有難き御意の趣疎かには致されず。菅丞相の所縁の者、此の村に置くからは、百姓共もぐるになつて、銘々が悴に仕立て、助けて歸る手も有る事。こりややい百姓めら、さは、とぬかさずとも、一人づつ呼出せ。面改めて戻してくりよ。」と、退引させぬ釘鏝、打てば響けの内には、夫婦豫て覺悟も今更に、胸轟かすばかり

はしこし

きみしり茄子
木(枝)からむしり
とつた小さい茄
子。

行はばかぢる小松
松よくとほまはひ
こころをさるゝ人
をけしきもあま
似ても似つかぬあま
もどめいぢりぢり
表松のあぬぢりぢり
祖父のあまぢりぢり
くさすぢりぢり
くさすぢりぢり

(本 璃 瑠 淨) 屋 子 寺

けられ、「お、こはや、嫁にもくはさぬ此の孫を、命の花落遁れし。」
なり。
表はそれとも白髪の親仁、門
口より聲高に「長松よ〜。」と呼
出せば「おつ」と答へて出てくる
は、腕白顔に墨べつたり、似ても
似附かぬ雪と墨。「これではな
い。」と、赦しやる。「岩松は居ぬか。」
と呼ぶ聲に「祖父様、何ぢや。」とは
しこくて、出てくる子供の頑是
なき、顔は圓顔きみしり茄子の詮
議に及ばぬ、連失せう。」と睨み附

胡亂

胴を据う
渡そ(渡さう)
手詰

と、祖父が抱へて走り行く。次は十五の澁くり「ほんよ、ほんよ。」
と親父が手招き「父よ、己はもう爰から抱かれて往の。」と、甘える
顔は馬顔で、聲「お、泣くな、抱いてやらう。」と、干鯉を猫なで親
が啞へ行く。「私が悴は器量よし。お見違へ下さるな。」と、斷り
言うて呼出すは、色白々と瓜實顔「こいつ胡亂」と引捕へ、見れば
首筋眞黒々、墨か痣かはしらねども「こいつでない。」と突放す。
其の外、山家奥在所の子供残らず呼出して、見せても見せても
似ぬこそ道理、土が産ました量り芋、子ばかりよつて立歸る。
「すは、身の上。」と源藏も、妻の戸浪も胴を据ゑ、待つ間程なく入
來る兩人「やあ源藏、此の玄蕃が目の前で、討つて渡そと請合う
た、菅秀才が首、さあ請取らう、早く渡せ。」と手詰の催促、ちつとも
臆せず、假初ならぬ右大臣の若君、搔首捻首にも致されず、暫く

相好

は御容赦。」と立上るを松王丸「やあ、其の手はくはぬ。暫しの容赦と隙どらせ、逃支度しても、裏道へは數百人を附置き、蟻の這出る處もない。生顔と死顔は相好が變るなどと、身代りの贖首、それもたべぬ。古手な事して後悔すな。」と言はれてぐつとせき上げ「やあ、いらざる馬鹿念、病みほうけた汝が目玉がてんぐり返り、逆様眼で見ようは知らず、紛れもなき菅秀才の首、追附け見せう。」「お、其の舌の根の乾かぬ中に、早く討て、とく斬れ。」と、玄蕃が權柄はつとばかりに源藏は、胸を据ゑてぞ入りにける。傍に聞居る女房は、爰ぞ大事と心も空、檢使は四方八方に、眼を配る中にも松王、机文庫の數を見廻し「やあ、合點の行かぬ。先達往んだ餓鬼等は以上八人。机の數が一脚多い。其の悴は何處にをるぞ。」と見咎められて、戸浪ははつと「いや、こり

權柄

捌く
瀬戸際
けしとむ
白臺
目通り
忍びの鰐元寛ぐ
固唾を呑む
性根所
淨玻璃の鏡

閻魔の廳にある鏡、この鏡に映して善人が善人か、悪人が悪人か、見分け、札を渡して極樂の札を渡して地獄へ送るといふ



手十

や今日始めて寺、いや寺参りした子がござんす。「何、馬鹿な。」「お、それ、是が即ち菅秀才のお机文庫。」と、木地を隠した塗机、ざつと捌いて言拔ける。「何にもせよ隙どらすが油斷のものと、玄蕃諸共突つ立上る。此方は手詰、命の瀬戸際、奥にはばつたり首討つ音、はつと女房胸を抱き、踏ん込む足もけしとむ内、武部源藏白臺に、首桶乗せてしづ、出て、目通りに差置き、「是非に及ばず、菅秀才のお首討奉る。固より大事なお首、性根をすゑて、さあ松王丸、しつかりと檢分せよ。」と、忍びの鰐元寛げて、虚といはば斬附けん、實といはば助けん、と、固唾を呑んで控へゐる。「は、何のこれしきに、性根どころか、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄極樂の境。家來衆、源藏夫婦を取巻きめされ。」畏つたと捕手の人數、十手振るつて立ちかゝる。

ためつすがめつ

女房戸浪も身を固め、夫は固より一所懸命、「さあ實檢せよ、檢分」といふ一言も命がけ、後は捕手、向かふは曲者。玄蕃始終眼を配り、こゝぞ絶體絶命と思ふ内、はや首桶引寄せ、蓋引明けた首は小太郎、贖というたら一討と、はや抜きかける。戸浪は祈願、「天道様、佛神様、憐み給へ。」と女の念力。眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て、「むう、こりや菅秀才の首討つたは、まがひなし、相違なし。」といふにもびつくり源藏夫婦、あたりきよろよる見合はせたり。檢使の玄蕃は檢分の詞證據に、「出かした、出かした。よく討つた。褒美には圍かまうた科赦してくれる。いざ松王丸、片ひん時も早く時平公へお目にかけん。」「いかさま隙取つてお咎めも如何。拙者は是よりお暇賜はり、病氣保養致したし。」「おゝ役目は濟んだ。勝手にせよ。」と首請取り、玄蕃は



(人形浄瑠璃)

寺子屋首實檢の場

青息吐息

館へ、松王は駕に揺られて立歸る。夫婦は門の戸びつしやり締め、物もえ言はず青息吐息、五色の息を一時いつときに、ほつと吹出すばかりなり。

胸撫下し源藏は、天を拜し地を拜し、あゝ有り難や忝なや。

凡人ならぬ我が君の、御盛徳が顯れて、松王めが眼が霞み、若君と見定めて歸つたは、天成不思議のなす所、御壽命は萬々年、悦べ女房。「いや、もう〜大抵の事ぢやござんせぬ。あの松王めが眼の球へ、菅丞相様が入つてござつたか。但し、首が黄金佛ぶつではなかつたか。似たというても瓦かがねと金寶きんぼうの花の御運開きと、餘り嬉しうて涙がこぼれる。はあゝ有難や尊や」と、悦び勇む折からに、小太郎が母いきせきと、迎と見えて門の戸叩き、「寺入の子の母でござんす。今漸く歸りました」といふ聲聞く

より又びつくり、一つ遁れて又一つ「こりやまあ何と、どうせう。」と、妻が騒げど夫は胴据ゑ、「こりや、最前言うたは爰の事。若君には替へられぬ。狼狽者」と、戸浪を引退け、門の戸ぐわらりと引明くれば、女は會釋し、「これはまあ、お師匠様でござりませうか。わるさをお頼み申します。何處に居やるぞ、お邪魔であるに。」といふを幸ひ、「いや奥に子供と遊んで居ります、連立つて歸られよ。」と、眞顔でいへば、「お、そんなら連れて歸りましょ。」



歌舞伎錦繪

わるさ

しれ者

經帷子

御内證

と、ずつと通る後より、只一討と斬附くる。女もしれ者ひつばづし、逃げても逃さぬ源藏が、刃鋭く斬附くるを、我が子の文庫ではつしと請けとめ、「これ待った、待たんせ。こりやどうぢや。」と、刎ねる刃も容赦なく、又斬附くる。文庫は二つ、中よりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の幡、顯れ出でしは、「こはいかに。」と、不思議の思に、劔も鈍り、進みかねてぞ見えにける。小太郎が母涙ながら、「若君菅秀才のお身代り、お役に立てて下さったか、まだか、様子が聞きたい。」といふにびつくり、「して、それ、は得心か。」「得心なりや、こそ此の經帷子、六字の幡。」「むう、して、其の許は何人の御内證。」と尋ぬる内に、門口より、「梅は飛び、櫻は枯る、世の中に、何とて松のつれなかるらん。女房悦べ、悴はお役に立つたぞ。」と、聞くよりわつとせき上げて、前後不覺に取

亂す。「やあ未練者め」と叱りつけ、ずつと通るは松王丸。見るに夫婦は二度びつくり。夢か現か夫婦かと、呆れて詞もなかりしが、武部源藏威儀を正し、「一禮は先づ後の事。これまで敵と思ひし松王、打つて變つた所存はいかに。訝しさよ」と尋ぬれば、「お、御不審尤も。存じの通り、我々兄弟三人は、銘々に別れて奉公。情なや此の松王は時平公に隨ひ、親兄弟とも肉縁切り、御恩請けた丞相様へ敵對。主命とはいひながら、皆これ此の身の因果、何とぞ主従の縁切らんと、作病構へ暇の願。菅秀才の首見たらば、暇やらんと今日の役目。よもや貴殿が討ちはせまい。なれども、身代りに立つべき一子なくば如何せん。爰ぞ御恩を報ずる時と、女房千代と言合はせ、二人の中の悴をば、先へ廻して此の身代り。机の數を改めしも、我が子は

著

めどぎ



手向

殺さしに (殺させに)

四十九日の蒸物

來たかと心の著。菅丞相には我が性根を見込み給ひ、何とて松のつれなからうぞとのお歌を、松はつれないつれないと、世上の口に懸る悔しさ。推量あれ、源藏殿。悴がなくばいつ迄も、人でなしといはれん、持つべき者は子なるぞや。といふに女房猶せき上げ、葦葉の蔭で小太郎が、聞いて嬉しう思ひましょ。持つべき者は子なりとは、あの子が爲によい手向。思へば最前別れた時、いつにない跡追うたを、叱つた時の其の悲しさ。冥途の旅へ寺入と、早蟲がしらせたか。隣村へ行くというて、途まで往んで見たれども、子を殺さしにおこして置いて、どうまあ内へいなるゝものぞ。死顔なりとも今一度見たさに、未練と笑うて下さんすな。包みし祝儀はあの子が香奠、四十九日の蒸物まで、持つて寺入さすといふ、悲しい事が世に有

死ぬる子は

玉ならずもありけ
むを、と人言はむ
や、されど死にし
子顔よかりき、と
いふやうもあり。
(土佐日記)

みめ

いて(行つて)

ほえる

らうか。育ちも生まれも賤しくば殺す心もあるまいに、死ぬる子はみめよしと、美しう生まれたが、可愛や其の身の不仕合はせ。何の因果に瘡瘡迄しまうた事ぢや」とせき上げて、かつばと伏して泣きければ、俱に悲しむ戸浪は立寄り、「最前にも、連合が身代りと思ひ附いた側へいて、『お師匠様今から頼み上げます。』というた時の事思ひ出せば、他人のわしさへ骨身が碎ける。親御の身ではお道理」と、涙添ふれば、「いやこれ御内證。こりや女房も何てほえる。覺悟した御身代り、内で存分ほえたてないか。御夫婦の手前もある。いや何、源藏殿。申し附けてはおこしたれども、定めて最期の節、未練な死を致したて御座らう。」「いや、若君菅秀才の御身代りと言聞かしたれば、潔う首差伸べ。」「あの逃隠れも致さずにな。」「につこりと笑うて。」

奴・八つ・九つ

浸する有難涙
「ひたすら有難涙に
ひたる」と聞えさ
せたいので、浸す
る」と破格を使つ
てゐる。

御臺所

「むゝ、出かし居りました。利口な奴、立派な奴、健氣な八つや九つで、親に代つて恩送り、お役に立つは孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立ちし、さぞや草葉の蔭よりも、羨ましかる、けなりかる。悴がことを思ふにつけ、おもひ出さるゝ出さるゝ」と、流石同腹同性を、忘れかねたる悲歎の涙。「なう、その伯父御に小太郎が逢ひますわいの。」と取附いて、わつとばかりに泣沈む。歎も漏れて菅秀才、一間の内より立出て給ひ、「我に代ると知るならば、この悲しみはさすまいに、かはいの者や。」と御袖を絞り給へば、夫婦ははつと共に浸する有難涙。「序ながら若君様へ御土産」と、松王突つ立ち、申し附けた用意の乗物、早く〜。と呼ばはるにぞ、はつ。と答へて家來共、お目通に昇据うる。「はや御出で。」と戸を開けば、菅丞相の御臺所。

横手を打つ

北嵯峨

京都市右京區嵯峨町の北部、大覺寺の邊。

河内の國へ

河内(大阪府)の土師の里に、道眞の息女刈屋姫はるる。

網代

「なう、母様か。」我が子か。」と、御親子不思議の御對面。源藏夫婦横手を打ち、方々と御行方尋ねしに、何處にか御座なされし。「されば、北嵯峨の御隱家、時平の家來が聞出し、召捕に向かふと聞き、某山伏の姿となり、危い處を奪ひ取つたり。急ぎ河内の國へお供なされ、姫君にも御對面。こりや、女房、小太郎が死骸あの乗物へ移し入れ、野邊の送營まん。」あい」と返事の其の中に、戸浪が心得抱いてくる、死骸を網代の乗物へ、乗せて夫婦が上著を取れば、あはれや内より覺悟の用意、下に白無垢麻袴、心を察して源藏夫婦、野邊の途に親の身で、子を送る法はなし。我々夫婦が代らん。」と立寄れば、松王丸「いや、是は我が子に非ず。菅秀才の亡骸をお供申す。何れもは、門火門火。」と、門火を頼み頼まる。御臺若君諸共に、しやくり上げた

六道能化

六道は、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の境界の六つを、衆生を、能く教化するもの、即ち地藏菩薩をいふ。

死出の山

冥途の閻魔王國の境にあるといふ。

鳥邊野

京都五條坂邊六道の東南、古より墓所、茶毘所である。

菅原傳授手習鑑

柳三好松格、竹田小出雲、合作の時代、淨瑠璃、延享三年(一七九六)八月、竹本座にて初演。

穂積以貫

儒者、經學の注釋書を多く出して、明和六年(一七六九)歿、年七十八。

難波土産

五卷、五冊、淨瑠璃の詞章を抽出して、評註を加へ、たも、の註を頭に下掲の文があつて、讀者に注目されてゐる。元文三年(一七九六)刊。

る御涙、冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛、釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、賽の河原で砂手本、いろは書く子のあへなくも、ちりぬる命是非もなや。あすの夜誰か添乳せん。らむ憂い目見る親心、劔と死出の山け越え、あさき夢見し心地して、跡は門火にゑひもせず、京は故郷と立別れ、鳥邊野さして連歸る。

(菅原傳授手習鑑)

近松答へていふ。藝といふものは實と虚との皮膜の間にあるものなり。なるほど、今の世、實事によくうつすを好むゆゑ、家老は眞の家老の身ぶり、口上をうつすとはいへども、さらばとて、眞の大名の家老などが、立役の如く、顔に紅脂白粉を塗る事ありや。また、眞の家老は顔を飾らぬとて、立役がむしや、と髭は生なり、頭は禿なりに舞臺へ出て藝をせば、慰になるべきや、皮膜の間といふがこれなり。虚にして虚にあらず、實にして實にあらず、この間に慰があつたものなり。

(穂積以貫「難波土産」)

近松門左衛門

本名杉森信盛、巢林子と號す、出生地未詳、淨瑠璃作者、狂言作者、享保九年(三六)歿、年七十二。

姫君

丹波國(京都府)の城主由留木殿の子、調の姫。

お乳の人

重の井、馬方三吉の實母、姫君の乳母。

ま一度

大殿様

由留木殿。

お袋様

由留木の夫人。

馬子

三吉。

待ちやや

馬方

うそくと

ぎやうに

一六重の井

近松門左衛門

お傍の衆に囃されて、幼心の姫君、かう面白い東とは、いま迄おれは知らなんだ。さあ、往かう、早往かう。「やあ御座らうとおつしやるか、そりやめでたいわ。」又もや御意の變らぬ間に、行列揃へと立騒ぐ。お乳の人は勇みをなし、「そんなら、ま一度大殿様お袋様とお盃。是も馬子殿お蔭ぢや。出来いた。」そちには禮いふ、褒美やる。其處に待ちやや。と、さざめき渡り、奥にお供し入りにけり。馬方はつひに見ぬ金の間を、うそくと覗き廻れど、筵の外踏みもならはぬ備後表、ええ此の座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりもこつちの内がけつこで御座る。と、獨言して居たりけり。お乳の

大高

大高檀紙、地白く厚く横に皺がある、備中國岡山縣越前國(福井縣)などに産する。

ぶんかう

文庫、こゝはその蓋。

けな者

御座ら(御座らう)

頂きや

三筋

三百文。

通し

げな

慮外な

人は大高にお菓子さま、ぶんかうに盛入れ、「どれ、三吉其處にか。まあ、其方はけな者ぢや。道中雙六お目にか、それ故に姫君様お江戸へ御座ると御意なさる。お上にも御機嫌。これは御前のお菓子、ありがたう頂きや。お錢三筋、買ひたい物買ひやや。殊にそちは通しぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の重の井に逢はうといや。見れば見るほどよい子ぢやに、馬方させる親の身はよく、てあらう。と、いと懇の詞の末、三吉つく、聞きすまし、由留木殿の御内、お乳の人の重の井様とはお前か。そんならおれが母様。」と、抱きつけば、「あ、こは慮外な、おのれが母様とは。馬方の子は持たぬ。」もぎ放せばむしやぶりつき、引きのくれば縋り付き、「なんの無い事申しませう。わしが親はお前の昔の連合、此

番頭
こな様

おろ覚え
沓掛
今、京都府乙訓郡
大枝村。



近松門左衛門

の御家中にて番頭伊達の與作、其の子はわたし、こな様の腹から出た與之介はわしぢやわいの。父様は殿様のお氣に違うて、國をお出なされたは三つの時でおろ覚え。沓掛の姥が咄には、「母様も離別とやらで殿様に御奉公、こなたを姥が養育し、父様に逢はせたり思へども甲斐もない。母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人重の井様と尋ねよ。」と懇に教へて、姥はおれが五つの年、久しう痰を煩

鳥羽

今、京都市伏見區。

石部

近江國（滋賀縣）甲賀郡にある町、舊東海道五十三次の一。

馬借

見さしやんせ

父様

丹波與作。

うてあげくに、鳥羽の祭禮に往て、餅が咽に詰まつて遂に死んでのけました。在所の衆がやしなうて、漸う馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公します。これ守袋を見さしやんせ、何の嘘を申しませう。お前の子に紛れはない。外に望は何もない。父様を尋ね出し、一日なりとも三人一所に居て下され。美事沓も打ちます。此の草鞋もわしが作つた。晝は馬を追うて、夜は沓打ち草鞋作り、父様、母様養ひませう。父様と一つに居て下され、拜みまする母様」と、取付き抱附き泣居たり。お乳ははつと氣も亂れ、見れば見る程我が子の與之介。守袋も覚え有り。飛附いて懷に抱き入れたく氣はせけども、あつあ大事の御奉公、養ひ君のお名の疵。詐つて叱らうか。いやかはいげにさうもなるまい。まあちよつと抱きた

こけ猿
氏より育ち

い。あゝどうせうと、百千色の憂き涙、雙つの目にはたもちかね、咽び沈みて居たりしが、いや／＼、吾が子ながらも賢しい者、詐つて誠とせず、母を心のきたない者と、さげしまるゝも情なし。譯を語つて合點させ、恥ぢしめて返さんものと、涙のごうて氣をしづめ、「こゝへ來い與之介」と、引寄せて兩手を取り、「さても大きうなりやつたの。とても成人せうならば、侍らしう何故尋常にも育たぬぞ。顔の道具手足まで、母はかうは産みつけぬ。美しい黒髪を此のやうに剃下げて、手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞ」と、又さめ／＼と泣きけるが、「これ物を合點しや。腹から産んだは産んだれども、今では子でも母でもない。淺ましう成りさがつたを嫌うていふでは更々ない。こゝの譯をよう聞きやや。母はもと御前様の奉公人。

奏者役
追腹
上げます

奉公構ひ
改易

與作殿は奥小姓。段々に奏者役番頭、千三百石までお取立。追腹程の御恩の家。其の間にそなたを設け、上には姫様御誕生、御内證のよしみにて、母が乳を上げまし、首尾さへよければ、そなたも今家老衆の子同然に二番と下座に下らぬ人。情なや父様が大事の所を仕損ひ、切腹に極まつた。なれども腹を切らせては、女房お家に置かれぬ時には、大事のお姫様の乳離れ、御病氣も出ればいかゞとて、母をそのまゝ残さうため、父様の命助り、奉公構ひの御改易。其の時母も一所に退けば、尤も夫婦の道はたつ。されどもお姫様の乳離れ、お苦しみをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん、残つて御恩を報じてくれ。と、父様のことわり故、第一は男の爲、夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたわいの。男の子は幼う

ば勘
し氣

ても御勘氣の末氣遣な。與作が子とばし言やんなや。さあ



(る據に本訂校藏勘木黒) 別子井の重

姫君様とわたしとは乳兄弟の事なれば、母様にさへ逢うたら

早う御門へ出や。あゝ如何なる因果な生れ性。現在吾が子に馬追させ、男の行方も知らぬ身が、母は衣裳を著飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乗つたとして、これが何になる事」と、聲を忍びに泣くばかり。子は生れつき賢くて、聞分ある程猶泣入り、悲しい咄を聞きました。さりながら、常に姥が申したは、

訴訟

ちやつと

養子嫁御

姫は關東の高家入
問家へ養子分とし
て、輿入をする。

蟻の穴から

千丈ノ堤モ蟻ノ
穴ヲ以テ潰ユ。(韓
非子喻老篇)

如才

不便も

うたらば、父様も出世なさるゝ由。御訴訟なされ下されかし。」
と、いへばちやつと口を押さへ、「あゝあゝ、勿體ない。其の乳兄
弟いはぬ事。姫君様は關東へ養子嫁御にお下り。高いも低
いも姫御前は大事のもの。先づは他人の世間體。三吉とい
ふ馬追が乳兄弟にあるなどと、どう妨にならうやら。蟻の穴
から堤も崩れる。軽いやうで重い事。ひそ〜いうて人も
聞く。先づ早う出てくれ。」と泣く〜いへば三吉、「あゝ、母様、餘
り遠慮過ぎました。先づいうて見て下され。」「まだいひをる
か、聞分ない。夫の事吾が子の事、母に如才が有るものか。合
點の悪い、聞分けない。」と、制する内に奥よりも、「お乳の人はどこ
にぞ。御前から召します。」と、呼ばはれば、「あれ聞きや、人が来る。
出てたも。」と、手を取つて引出す。不便や三吉しく〜涙。頬

見まつぶ

痲疹

式臺
段箱
服紗

惣領

胴慾な

魂消入る

冠して目を隠し、杳見まつべて腰に付け、見すぼらしげな後影。「こりや、ま一度こちら向きや。山川で怪我しやんな。雨風雪ふり、夜道には腹が痛い」と作病起し、二日も三日も休んで、煩はぬやうにしてたも。毒な物喰はずに、下痢や痲疹の用心しや。可愛のなりや、いたしや。千三百石の代取が、何の罰ぞ咎ぞ。」と、式臺の段箱に身を投伏して歎きしが、懐中の有合ひ一歩十三服紗につゝみ、これ嗜みに持つて居や。」と、涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り恨めしげに、「母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬおかまひ。その一歩もいらぬ。馬方こそすれ、伊達の與作が惣領ぢや。母様でもない他人に金貰はう筈がない。えゝ、胴慾な母様、覺えて居さつしやれ。」と、わつと泣出す其の有様。母は魂消入りて、「養ひ君お家の御恩思はず

ひら付け

宰領

じねんじよ
ぎごつなし

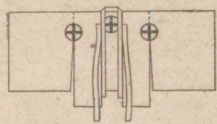
丹波與作

近松門左衛門作の
世話淨瑠璃、正徳
二年(一七二七)竹本座
初演。

ば、さて一人子を手放してなんの遣らうぞ。奉公の身の淺ましや。」と、悶え焦れて歎きける。時に奥口ざゝめいて、「早おん立。」と、姫君の御輿舁きあげ行列立て、お乳の人の乗物をひら付けにこそ舁寄せけれ。お乳はさあらぬ顔つきして、「姫君のお伽に、最前の馬方を此の乗物に引付け、お慰みに謠はしや。」と、「畏つた。」と、宰領ども、「こりや、其處なじねんじよめ、謠ひをらう。」と、ぎごつなく、「やあ、此奴はほえをるか。何ぢやこりや忌々し。」と、握拳を二つ三つ、いたゞきながら泣聲に、「坂は照るゝ、鈴鹿は曇る。土山あひの、あひの土山雨がふる。」ふる雨よりも親子の涙。中にしぐるゝ雨やどり。

(丹波與作)

素襖



隠れもない
太郎冠者
念なう
申し入る
申し上げう
(上げ
よう)

一七末ひろがり

大名 立烏帽子素襖袴小き刀

冠者 半袴

盗人 括り袴傘

大名罷り出でたるは、隠れもない大名。太郎冠者あるか。
冠者御前に。大名念なう早かつた。汝をよび出すは別なる
事でない。明日はいづれもを申し入れうと思ふが、何とあら
うぞ。冠者まことに内々は御意なうても、申し上げうと存ず
るところに、一段でござりませう。大名よからうな。冠者は
つ。大名さうあれば、引出物には何をか出さうな。冠者され
ば、何が好うござりませうぞ。大名やい、思ひ附けた。下から

末ひろがり

大儀ながら

頼うだる者

都さうに

失念の

てい



(畫挿本古) りがろひ末

は、上が計らはれぬものぢや。某は末ひろがりを出さうと思
ふが、何とあらうぞ。冠者ようござ
りませう。大名、汝は大儀ながら、上
方へ上り、急いで求めて参れ。冠者
畏つてござる。大名、急げ。冠者は
つ。扱も、某が頼うだる者は、立
板に水を流すやうに物をいひつけ
られます。まづ急いで参らう。
とかう申すうちに、都さうにござり
ます。やれ扱失念の致した。末
廣屋を存ぜぬが、何と致さうぞ。え
い、欲しいものは呼ばはるていに見えてござる。某もこれか

すぐに
どんどと
さわたる
見ませうず
わつばと

お見知りやつた

をりやる

見せさつしやれ

ら呼ばはりませうぞ。末廣買はう、末廣買はう。すり罷り出
でたるは、洛中に住居する、心もすぐにない者でござる。何者
やら、どんどと申すほどに、さわたつて見ませうず。なうく、
其方は何をわつばとおしやるぞ。冠者、その事でござる。田
舎者でござれば、末廣屋を存ぜぬによつて、かやうに申す事
でござる。すりなう其方は、末廣といふものをお見知りやつた
か。冠者、なう都人とも見えぬ。知つたれば、これを買はうと
いふ。すりなうく、誤りました。某は末廣屋の亭主でをり
やるによつて、懇に問うてをりやる。冠者は、仕合はせな事
でござる。して、末廣の出来合はござるか。すりなかく、ご
ざる。冠者、いで、見せさつしやれ。すり、心得てござる。それ
に待たつしやれ。冠者は、すり、やれ扱、賣らうとは申してご

ごろんじやれ
いかい

師走狐
信濃木賊

木賊は信濃國(長
野縣)の名産であ
る。
木賊



ざるが、何を賣りませうぞ。思ひ付けてござる。これに傘が
ござるほどに、これを持って賣りませう。なうく、田舎人、そ
れにござるか。これく。冠者、やは、これが末廣でござるか。
すり、なかく。冠者、どれ見せさつしやれ。すり、これ、ごろん
じやれ。冠者は、誠に廣げさつしやれたれば、はて、いかい末
廣でござる。さりながら、頼うだ人が注文のおこされてござ
るほどに、これに合うたらば、買ひませう。すり、さらば讀まし
やれい。冠者、先づ地紙好くとしてござる。すり、これく、地
紙好くとは、この紙の事ををりやる。師走狐の如く、こんく、
といふほど張つてござる。冠者、骨磨きとござる。すり、これ
これ、骨磨きとは、この骨の事、信濃木賊をかけて磨いたによつ
て滑々致す。冠者、要元締めてとござる。すり、要元締めてと

これへ
傘の柄の所をさし
ていふ詞、ざれ繪
とざれ柄とは掛け
てある。
おぢやる

高直

萬正

昔二十五文を一疋
といたつた。

ぬく

買やる

は、かう廣げて、この金でもつてじつと締めるによつて、この
事でござる。冠者繪は戲繪ごれみとしてござる。すりふん、これこ
れ田舎人、これへ寄らつしやれい。えい。冠者なうく、其方
は田舎人ぢやと思つて、打擲めさるか。すりいや打擲ておぢ
やらぬ。こなたと某と、かうして戯れるを以て、則ち戲繪とい
ひまする。冠者扱もく、注文に合つて嬉しうござる。して、
價は如何ほどでござるぞ。すり高直かうちきにおぢやる。冠者幾ら
ほどでござるぞ。すり萬正まんせいでをりやる。冠者これは又高い
事でござる。ちつとねぎりませう。すりおう、少しなどはぬ
いてやりませう。冠者百ばかりになりますまいか。すりな
うそこな人、そのやうな下直げぢきな物ではない。ようお買やるま
いぞ。冠者申し、何と聞かつしやれたぞ。萬正の内をば、

進じよ(進じよう)

自然とも
そうば

百ばかりもぬいて下されまいかといふ事でござる。すり「は
あ、聞分けました。五百ぬいて進じよ。冠者忝うこそござれ。
すり」して代物だものは、何處で渡さつしやれまする。冠者三條の布
袋屋で渡しませう。すり「これで受取りませう。冠者忝うご
ざる。さらばく。すり「なうく。冠者何でかござるぞ。
すり」其方は定めし主持でござる。冠者なかく。すり「人の
主は機嫌の善い事もあり、又悪い事もある。若し自然とも、
機嫌の悪しうおぢやるそうば、かう仰しやつたがようおぢや
る。冠者扱もく、忝うこそござれ。すり「ようをりやつた。
冠者やれ扱、まづ頼うだ者に、急いで御目につけらう。殿様ご
ざりまするか。大名太郎冠者、戻つたか。冠者歸りました。
大名やら大儀や、急いで見せい。冠者はつ。大名こりや何ぢ

念をつかふ

や。冠者末廣でござりまする。大名これがや。冠者はあ、殿様のお合點が参らぬこそ道理でござりますれ。かう致しますると、きつら廣がりまする。大名ふん、まことにこれはいかい末廣ぢやわいやい。して、おのれは注文に合はして來たか。冠者なか、合はせましてござる。それで讀まつしやれませい。大名急いで合はせをろ。先づ地紙好しと。冠者はあ、それこそ念をつかひましたれ。この紙のこととござる。師走狐の如く、こん／＼といふほど張つてござりまする。大名かけて磨いてござるによつて、滑々致しまする。大名要元締めては。冠者かう廣げまして、この金で締めるをもつて、これが要元締めてといふところとござる。大名繪は、戲繪は。

覺えたか
傘の柄で主人を突
く時の詞。

定

うせをり

ひよんな
なんだ

冠者それにこそ念のつかひましたれ。それに待たつしやれませい。や、覺えたか。大名や、これは何をしをるぞ。冠者いや申し、この柄でかうして戯れるをもつて、ざれゑと申しまする。大名やいそこな奴、して、おのれは知らぬが定か。冠者は、いや、存じませぬ。大名知らずばこれへ寄りをろ。末廣とは扇の事。これはおのれ古傘を買うてうせをり、いや末廣で候の、戲繪で候の、某が前へは叶ふまい。退りをろ。やれ、さて、憎い奴かな。冠者まことに頼うだ人のいはるれば、これはさし傘ぢやげなものを。ひよんな事をいたした。さりながら、都の者も皆まではぬきませなんだ。機嫌直しを教へてくれた。まづ急いで申して見ませうず。はやし、いえい、かさをさすならば、かすがやんま、これもかみのちかひと、人がかさをさそなら、

かみのちかひ
神の誓ひと紙の違
ひとを掛けてあ
る。

曲者

ひやろく
笛の譜。
狂言記
狂言の詞章をあつ
めたもの。

おれもかさささうよ。げにもさあり、やよ、げにもさうよの。
いえい、かさをさすならば、かすがやんま、これもかみのちかひ
と、人がかさをさすなら、おれもかさささうよ。げにもさあり、
やよ、げにもさうよの。やよ、げにもさうよの。大名いかにや、
いかにや、太郎冠者、買物にぬかれて囃物をするとは、前代の曲
者、身が前へは叶ふまい。冠者、げにもさあり、やよ、げにもさう
よの。やよ、げにもさうよの。大名、買物にはぬかれたが、まづ
此方へこげ入つて、鰻の鮓をばえいやつとほ、張つて、ようか
酒を飲めかし。冠者、げにもさあり、やよ、げにもさうよの。
大名、何かの事はいるまい。人がかさをささうなら、おれにも
かささせやれ。笛ひやろく、ほつばい、ひやろ、ひい。

（狂言記）

一八 隅田川



ワキ「これは武藏の國隅田川の渡守にて候。今日
は舟を急ぎ人々を渡さばやと存じ候。又、こ
の在所にさる仔細あつて、大念佛を申す事の候
間、僧俗を嫌はず人数を集め候。その由皆々心得候へ。」

ワキツレ次第、末も東の旅衣、末も東の旅衣、日も遙々の心かな。



詞かやうに候者は、都の者にて候。われ東に知
る人の候程に、かの者を尋ねて唯今罷り下り候。
道行論、雲霞、あと遠山に越えなして、あと遠山に越
えなして、いく關々の道すがら、國々過ぎて行く程に、こゝぞ名
に負ふ隅田川渡に早く著きにけり、渡に早く著きにけり。詞

この在所

梅若塚のある里を
指してゐる、今の
東京向島に塚の舊
址がある。

大念佛

末も東の旅衣、日
も遙々の
人の候、まかり下
り候

雲霞あと遠山

和漢朗詠集、紀齊
名の詩、「山遠く雲
ハ行客ノ跡ヲ埋
メ、松寒ク風ハ旅
人ノ夢ヲ破ル。」に
據つたもの。
わたり、わたし

乗らうする
なかくの事

人の親の心
人の親の心は闇に
あらねども子を思
ふ道にまどひぬる
かな。藤原兼輔
後撰集

思ひ白雪の
聞くや如何に

聞くや如何に上の
空なる風だにも松
に音する習ありと
は。宮内卿。新古今
集

真葛が原
今、京都市東山区
東山の麓。圓山公
園の一部の舊稱

急ぎ候程に、是ははや隅田川の渡にて候。又、あれを見れば舟
が出て候。急ぎ乗らばやと存じ候。いかに船頭殿、舟に乗ら
うずるにて候。ワキ、なかくの事、召され候へ。まづ、お出
て候後の、けしからず物騒に候は何事にて候ぞ。ワキツレさん
候。都より女物狂の下り候が、是非もなく面白う狂ひ候を見
候よ。ワキ、さやうに候はば、暫く舟を留めてかの物狂を待たう
ずるにて候。

シテ、サシ誼一聲「げにや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ
道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行き人に言傳てて、行方を
何と尋ぬらん。聞くや如何に、上の空なる風だにも、地誼「松に
音する習あり。シテ誼、真葛が原の露の世に、地誼、身を恨みてや
明暮れん。シテ誼、これは都北白河に、年経て住める女なるが、思

北白河

京都市左京區北白
河

思はざる外に

逢阪の關
京都に入る要所、
近江國(滋賀縣)逢
坂山にあつた關
所

そなたとばかり思
ひ子

千里を行く

親千里ヲ行クモ子
ヲ忘レズ。(白氏文
集)

四鳥の別

桓山ノ鳥四子ヲ生
ム、羽翼ハ既ニ成
リマサニ四海ニ分
カレントス、ソノ
母悲鳴シテ之ヲ送
ル。(孔子家語)

武藏の國と

武藏の國と下總の
國との中にいと大
きな川あり、そ
れをすみだ川とい
ふ。(伊勢物語)

お事



はざる外に一人子を、人商人に誘はれて、行方を
聞けば逢阪の關のひがしの國遠き、東とかやに
下りぬと聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり
思ひ子の、跡を尋ねて迷ふなり。地誼下歌「千里を

行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、地誼上歌もとよりも、契假
なる一つ世の、契假なる一つ世の、そのうちをだに添ひもせて、
こゝやかしこに親と子の、四鳥の別これなれや。尋ぬる心の
果やらん、武藏の國と、下總の中にある、隅田川にも著きにけり、
隅田川にも著きにけり。

シテなら、われをも舟に乗せて給はり候へ。ワキ、お事はい
づくよりいづ方へ下る人ぞ。シテ、これは都より人を尋ねて下
る者にて候。ワキ、都の人といひ狂人といひ、面白う狂うて見せ

乗すまじいぞ
うたてやな
日も暮れぬ

渡守「はや舟に乗
れ、日もくれなむ」といふに云々。(伊勢物語)

名にし負はば
伊勢物語にある
歌。

白き鳥

白き鳥の(中略)京には見えぬ鳥なれば皆人見しらず、渡守に問ひければこれなん都鳥といふ。(伊勢物語) 都鳥



候へ。狂はずはこの舟には乗すまじいぞとよ。シテ「うたてやな、隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ舟に乗れとこそ承るべけれ、誰かたの如くも都の者を舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守ともおぼえぬ事なのたまひそよ。ワキ「げに、都の人とて名にし負ひたるやさしきよ。シテ「ならその言葉はこなたも耳にとまるものを。かの業平もこのわたりにて、「名にし負はば、いざこと問はん都鳥、わが思ふひとは有りやなしや」と、なる舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。ワキ「あれこそ、沖の鷗候よ。シテ「うたてやな、浦にては千鳥とも言へ鷗とも言へ、などこの隅田川にて白き鳥をば、都鳥とは答へ給はぬ。ワキ「誰げに、誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さず、シテ「誰

舟競ふ

舟競ふ堀江の川の
水際に來居つゝ鳴
くは都鳥かも。(天
伴家持「萬葉集)

難波江

難波(大阪)の入江
といふ意に用ひ
た。

思へば遠く

その河のほとりに
群れあて「思ひや
れば限なく遠くも
來にけるかな」と
わびあへるに云
々。(伊勢物語)

舟こぞりて

舟こぞりて泣きに
けり。(伊勢物語)
大事の渡
かまへて

沖の鷗と夕波の、ワキ「誰昔にかへる業平も、シテ「誰ありやなしやと言問ひし、地「誰我もまた、いざ言問はん都鳥、いざ言問はん都鳥、わが思ひ子は東路に有りやなしやと問へども、答へぬはうたて都鳥、鄙の鳥とやいひてまし。げにや舟競ふ堀江の川の水際に、來居つゝ鳴くは都鳥、それは難波江これは又、隅田川の東まで、おもへば限なく、遠くも來ぬるものかな。さりては渡守、舟こぞりて狭くとも、乗せさせ給へ渡守、さりては乗せてたび給へ。ワキ「かゝるやさしき狂女こそ候はね。急いで船に乗り候へ。この渡は大事の渡にて候。かまへて静かに召され候へ。

「ワキツレ」ならあに向かひの柳のもとに、人の多く集りて候は何事にて候ぞ。ワキ「さん候あれは大念佛にて候。それにつきて

奥

違例す

路次

たんだ(たど)

吉田の何某

木母寺縁起には吉田少將惟房とある。



哀なる物語の候。この船の向かひへ著き候はん程に語つて聞かせ申さうずるにて候。さても去年三月十五日、しかも今日に相當りて候。人商人の都より、年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひとつて奥へ下り候が、この幼き者、未だ習はぬ旅の疲にや、以ての外に違例し、今は一足も引かれずとて、この河岸にひれふし候を、なんぼう世には情なき者の候ぞ、この幼き者をばそのまゝ路次に捨てて、商人は奥へ下つて候。さる間この邊の人々、この幼き者の姿を見候に、由ありげに見え候程に、様様に勞りて候へども、前世の事にもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、お事はいづく如何なる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候へば、「われは都北白河に、吉田の何

かどはす

足手影

築き籠む

逆縁

某と申しし人の、たゞひとり子にて候が、父にはおくれ母ばかりに添ひ參らせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになり行き候。都の人の足手影もなつかしう候へば、この道のほとりに築き籠めて、しるしに柳を植ゑて給はれ。とおとなしやかに申し、念佛四五返唱へ遂に事終つて候。なんぼう哀なる物語にて候ぞ。見申せば船中にも少々都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて御弔ひ候へ。由なき長物語に舟が著いて候。疾うとう御上り候へ。ワキツレいかさま、今日はこの所に逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうずるにて候。

ワキ如何にこれなる狂女、何とて舟よりは下りぬぞ。急いで上り候へ。あらやさしや、今の物語を聞き候ひて、落涙し候よ。

なう急いで舟より上り候へ。シテ「なう舟人、今の物語はいつの事にて候ぞ。ワキ、去年三月今日けふの事にて候。シテ「さてその兒ちこの年は。ワキ、十二歳。シテ「主の名は。ワキ、梅若丸。シテ「父の名字は。ワキ「吉田の何某。シテ「さてその後は親とても尋ねず、ワキ「親類とても尋ね来ず。シテ「まして母とても尋ねぬよ、なう。ワキ「思ひもよらぬ事。シテ「誰たれなら親類とても親とても尋ねぬこそ理なれ。その幼き者こそ、この物狂が尋ねる子にてはさむらへとよ。なうこれは夢かや、あらあさましや候。ワキ「言語道斷の事にて候ものかな。今まではよその事とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞや、あら痛はしや候。かの人の墓所むらじを見せ申し候べし。こなたへ御出で候へ。

さりとも

シテ「誰今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下

道の邊に

古墓何レノ代ノ人
ゾ、姓ト名トヲ知
ラズ、化シテ路傍
ノ土トナリ、年々
春草生ズ。(白氏文
集)

帚木

信濃國(長野縣)下
伊那郡智里村蘭原
といふ所にあつた
といふ傳説の木。

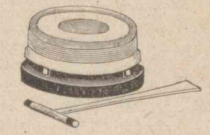
生死長夜

末ダ眞覺ヲ得ザレ
バ常ニ夢中ニ處
ル、故ニ佛説生死
長夜ト爲ス。(唯識
論)



りたるに、今はこの世になき跡の、しるしばかりを見ることよ。さても無慙むごんや死の縁ゆかりとて、生所なまところを去つて東の果の道の邊ほとりの土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、この下にこそあるらめや。地誼ぢぎさりとは人々この土をかへして今一度、この世の姿を母に見せさせ給へや。上歌残りても、かひあるべきは空しくて、かひあるべきは空しくて、あるはかひなき、帚木はきの見えつ隠れつ面影おもかげの、定めなき世の習、人間にんげんうれひの花盛、無常むじやうの嵐音あらしね添そひ、生死長夜しじやうちやの月の影不定の雲おほへり。げに目の前の浮世うきよかな、げに目の前の浮世うきよかな。ワキ「今は何と御歎なげき候ひてもかひなき事、たゞ念佛ねんぶつを御申し候ひて、後世ごせいを御弔なぐさひ候へ。誰たれすでに月出て川風がわかぜも、はや更過

鉦鼓



梟鐘

西方極樂世界
是ヨリ西方十萬億
佛土ヲ過ギ世界
アリ、名ヅケテ極
樂トイフ。(阿彌陀
經)

ぐる夜念佛の時節なればと面々に鉦鼓を鳴らしすゝむれば、
シテ謠母はあまりの悲しさに、念佛をさへ申さずして、唯ひれふ
して泣居たり。ワキウたてやな、餘の人多くましますとも、母の
弔ひ給はんをこそ、亡者も喜び給ふべけれど、謠鉦鼓を母に參
らすれば、シテ謠わが子の爲と聞けばげに、この身も梟鐘を取
上げて、ワキ謠歎をとゞめ聲澄むや、シテ謠月の夜念佛諸共に、
ワキ謠心は西へと一筋に、シテ、ワキ謠南無や西方極樂世界、三十
六萬億、同號同名阿彌陀佛、地謠南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南
無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ謠隅田河原の、波風も聲たて添
へて、地謠南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ謠名
にし負はば都鳥も音を添へて、子方、地謠南無阿彌陀佛、南無阿
彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ、なうく、今の念佛の内に、まさしく

今一聲

行きやらで山路く
らしつ時鳥今一
聲の聞かまほしき
に。(藤原公忠一拾
遺集)

ます鏡
東雲の空

觀世流謠曲本
能樂の一派、觀世
流で作つた能の詞
章本、觀世流は、足
利義滿の頃、能を
創始した觀阿彌及
び世阿彌を祖とす
る。

わが子の聲の聞え候。この塚の内にてありげに候よ。ワキ我
等もさやうに聞きて候。所詮此方の念佛をば止め候べし。



母御一人御申し候へ。シテ謠今一聲こそ聞かまほ
しけれ。南無阿彌陀佛。子方謠南無阿彌陀佛、南
無阿彌陀佛と、地謠聲の中より、幻に見えければ、
シテ謠あれはわが子か、子方謠母にてましますか
と、地謠互に手に手を取りかはせば、又消えぎえ
となり行けば、いよく思はます鏡、面影も幻も、
見えつ隠れつする程に東雲の空も、ほのく、と
明行けば跡絶えて、わが子と見えしは塚の上の、草茫茫々として、
唯しるしばかりの浅茅が原となるこそあはれなりけれ、なる
こそあはれなりけれ。

(觀世流謠曲本)

西川一草亭

京都市の人、去風流の家元、明治十年(一八七七)生。

一九花 心

西川一草亭

一枝 振

布置

日本の生花で一番大事な事は枝振を生かす事である。其の點は、抛入も立花も同じ事で、日本の生花の總べてに共通した目的だと言へる。枝振がよい、悪いといふ事と、其の布置が當を得て居ると否とが、其の優劣可否を判断する唯一の標準である。

リズム
「韻律」の意、英語。

枝振にはリズムがあり、それが、見る人に音樂的の快味を與へ、又、日本畫の筆勢を味ははせる。是は西洋の草花には無いやうである。是は日本人の自然に對する趣味と教養といふ事から來てをり、殊に日本畫の影響が餘程あると思ふ。併し、

ヒマラヤ杉



こじれる

それと同時に日本の植物が曲折に富んで居て、小さな二三尺の小枝にまで一種の變化が見られ、風流が味ははれるといふ事が大きな原因になつて居ると思ふ。若し、日本の自然が、西洋の自然の様に、ヒマラヤ杉や、ポプラの様な物ばかりだつたら、いくら自然に對する趣味教養が深くても、かういふ生花はおもひ附けないであらう。アメリカ人で花の稽古を始めた夫人が、折角花を習つても、私の國にはかういふ面白い枝振の木が無い、花菖蒲や百合はあるが、木物が無いから駄目だといふ。

日本の自然は到るところに枝振の好い木に富んで居る。國が小さいから、木まで大きくならないで、小さくこじれてしまふ、島國的で駄目だ、といふ人があるが、それはさうかも知れ

ぬが、其のこじれた自然を生かして独自の生活に役立てたのだから、つまり、日本の生花といふものは日本の環境が生んだのである。是は生花ばかりでなく、日本の庭園や盆栽に就いても同様な事が言へる。

二 取合はせ

枝振の面白いものが、日本の生花としては最も賞美されるので、其の點から梅などが最も適當な材料に見られてゐる。梅は花や匂もよいが、梅の東洋人に最も喜ばれるのは、其の木振である。梅は木に精神があるといはれ、其の幹や枝に、書又は畫を見る様な一種特別の趣がある。

草花には木に見るやうな面白い枝振のものが少い。殊に牡丹芍薬など花の美事な程枝振の面白味が無い。それでさ



蜀葵

玫瑰

ういふ花を生かすために工夫したのが、花の取合はせてある。取合はせといふのは、牡丹に木蓮を添へるとか、燕子花かきつばたに柳をあしらふとかいふのであつて、花が美しくて線の變化に乏しい物に、木振の面白い物を添へて其の單調の弊を救ふのである。此の取合はせを支那文人は「使令」と言つて、これを召使に比し、牡丹は玫瑰はまぐさ、薔薇を婢ひとし、芍薬は罌粟けし、蜀葵あまひを婢と爲すなど述べて居るが、牡丹に薔薇の花を取合はせたり、芍薬に罌粟の花を添へたりするのは、取合はせとしてもつとも拙劣をきはめて居る。それは、一つは支那人の趣味が日本人の様に淡白でなく、一體に濃厚な爲でもあるが、日本の生花の取合はせから言へば、鯛のあとへ鰻を出すやうな物で、丸で取合はせの要領を得て居ないと思ふ。取合はせは一方の花の足らぬ點

を補ひ、或は、それと對照の働を爲すものでなければ意味を爲さぬ。牡丹に薔薇などあしらつては互に其の美しさを減殺される。牡丹に竹でもあしらへば、牡丹の重々しい感じが、竹の輕快な枝振清素な趣とよい對照をなして互に引立つて見えると思ふ。

尙この取合はせには、もう一つ背景の意味を爲す事がある。

三 背景と點景

二種以上の花を取合はせるのに、是を背景として用ひる場合と、點景として添へる場合とある。背景は其の花の咲いた場所を聯想させて、其の花に深味を持たせるのが目的である。だから、其の花と同時に咲いた花を用ひる事が必要である。

點景



蓼



木槿

梅を生けて菜種の花を添へ春郊の景色を聯想させるとか、蓮に蓼をあしらつて、池邊の景を想像させるとか言ふのが背景である。尤も、花の咲いた物に限らない、花のないものでも其の花の周圍にあるものなら、何でも背景の用を爲すだらう。梅に竹を添へて竹外一枝の趣を示すなどもよいし、蓮に蘆を添へたり、柳をあしらつたりしてもよい。花の咲いたものを二種取合はせるよりも、却つてさういふ花の無い物をあしらつた方が効果が多いかも知れぬ。

それと、もう一つの場合は點景として用ひる事である。青白い梨の花を生けて赤い椿を添へたり、萩を生けて白い木槿の花を挿添へたりするのは點景である。點景は景色の聯想が廣く、單に其の花の物足りない感じを助けるのが目的であ

る。だから、點景の花には、同所に咲く花を選ぶ必要は無い。配色の關係や、花の大きさ、枝の大小、長短などを考へてなるべく趣の違つた物を用ひる事が必要である。併し、點景で同時に背景の意味を爲す物もある。柳に燕子花の取合はせなども、燕子花からいへば背景として柳を添へた事になるけれども、若し柳を生ける事が目的であつて、其の根締として燕子花を用ひた事になれば、燕子花は一種の點景である。蓮に蓼をあしらふなども背景とも見られ、同時に又、點景の意味にも解せられるのである。

背景の爲には挿花を研究する人は、只それを生ける技術を練習するばかりでなく、暇があれば郊外に出て、其の花がどんな場所に、どんな草や木と雜つて咲いて居るかを研究して置

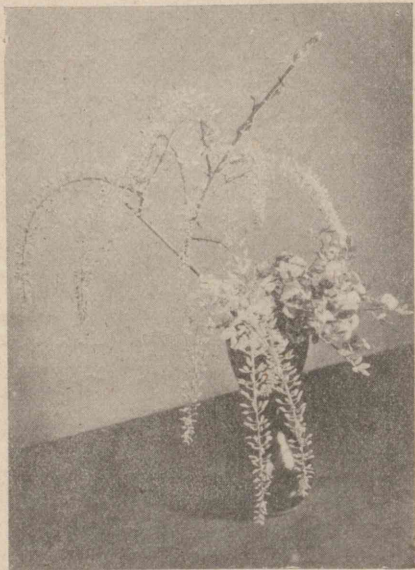
箱根

神奈川県西南部

關ヶ原

岐阜縣不破郡

藤袴



紅藤に木香花

く必要がある。私は東京、京都を往復する度に、汽車が箱根や關ヶ原の山間を走る時は、大抵窓外に目を送つて居る。そして、秋は龍膽や女郎花や、藤袴、草藤などがすゝきの中に咲亂れて居るを眺め、夏は薔薇、百合、萱草などが野いばらや、わらびやぜんまいの中に一莖二莖、或は五六莖もかたまつて咲いて居るのを美しい物に感じて飽かず眺めて居る。自然の中に咲いて居るのを見ると、決して何もない土の中からひよつこり首を持ち上げて居る様な花は一つも無い。ど

の花もどの花も、青々とした草の繁みに入雑つて咲いて居るのだから、花壇に作つてある花とはまるで趣が違ふ。生花もやはりかういふ雑草を取合はせて、自然の中に咲いた趣を示す事が必要だと思ふ。そこになると、西洋花にはさういふ景色の聯想が私には一つも無いから、裝飾以上の趣を感じず事が出来ない。西洋花を生けるには、矢張り、一度は西洋の郊外を旅行する必要がある。西洋花は只美しいばかりで、日本の花程深い趣味が無いといふ人が多いのは、一つは此の背景に對する聯想が無いからだと思ふ。

(茶心花語)

茶心花語

西川一草亭著、茶の湯と生花との事についての論を集む、昭和六年(三五)二月三月刊行。

奥田正造

岐阜縣の人、教育者、東京成蹊高等女學校長、明治十七年(五四)生。

二〇 茶道の精神

奥田正造

茶道の精神を簡単に言現せば、「和敬清寂」の四字に盡きる。この四字が尊重せられつゝ傳はつたことは、貴いことであり、又、うれしいことである。この四字を言換へると、能和能敬能清能寂の四綱領となる。

和は和合の和、調和の和、和樂の和である。「禮の用は和を貴しとなす。」人相、我相に役せられ、知るにおごり、知らざるを辱しむるやうな人は、人として人に交る資格がない。併し、如何に和が貴いというても、和だけでは狎れ易い嫌があるので、これを攝するに敬を以てするといふのである。敬とは自己に對して慎み、他人に對して敬ふといふ心持で、程子の所謂主一

禮の用は

聖徳太子憲法十七條の中の御言葉。

狎れる
程子

程明道、宋代の哲學者。(西曆一〇三三—一〇八五)

主一無適

儀容

利休

名は宗易、千家流
茶道の祖、秀吉に
仕ふ、天正十九年
(三五)自刃、年六
十九。

茶筌



水屋

屈強

無適、即ち専念である。而して、その形に現れたものが儀容である。清はいふまでもなく、清潔清廉の清であり、物と心との清であるが、殊に茶器を扱ふ時の清は茶味の第一義である。田舎人が五兩の金を利休に送つて、茶器の購入を乞うた時に、利休はたゞ茶筌と茶巾ばかりを送つた。白いきれいな茶巾ですつきりと拭はれ、新しい茶筌で茶が^た點てられた時、入れた^{うつは}器はたとひ古いかけた茶碗でも、それはもはや、かけ茶碗ではないのである。直接客には見えない水屋の働、家庭に於ては臺所勝手元の働に、若しこの清が缺けてゐたならば、どうして眞實の茶味が出て來よう。以上に加へて心のおちつき、即ち寂が具る様になれば、もう申分がなくなるのである。本來茶道は、きのふ屈強の若者もけふは戦場の露と消え、高壯の建物

鎮靜劑
兵馬倥傯

一舉手一投足



茶室

も忽ちにして灰燼に歸する、戦國の果敢なくそは、しい時代の氣分に對する鎮靜劑として要求せられ、發達したものであるから、自然に兵馬倥傯の間に得らるゝ僅かの暇を利用して、時間を超越した悠久の自己に悟入すべく、その一舉手一投足にも、心のおちつきを宿すことを要求するやうになつたので、これが即ち寂である。この和敬清寂の四字を標的として、各自相應の天地を開く所に、茶道の妙味がある。

準 據
珠 光

足利時代の人、所謂茶道の祖、奈良稱名寺の僧、後紫野大徳寺の一休禪師に参じた、文龜二年(三六三)寂、年八十一。

義 政
足利義政、延徳二年(三五〇)薨、年五十六。

以上の四綱領は茶道の大精神である。しかし、よく考へると、これは單に茶室裏に限ることではなく、人生萬般のこと、皆この四字で律せられる。修行の道場は四疊半でも、活用の舞臺は人生全體に互り、事々物々、念々刻々に通じて、日常生活の準據となるわけである。茶道の徳は實に茲に在る。珠光は、義政に答へた言葉の中で、「茶は遊に非ず、藝に非ず、又、放樂に非ず、一味清淨法喜禪悦なり」といひ、又、賓主應接の禮、彼此談論の和、而もその交水の淡きに似て、清遊仙の如し」というてゐる。利休は、「和ぎて流れず、敬して諂はず、清くして潔く、寂にして躁しうせざれ」といひ、「茶は精行儉徳の人によるし」というてゐる。この精行儉徳といふ四字は、和敬清寂の四字を姿に現したやうなものである。



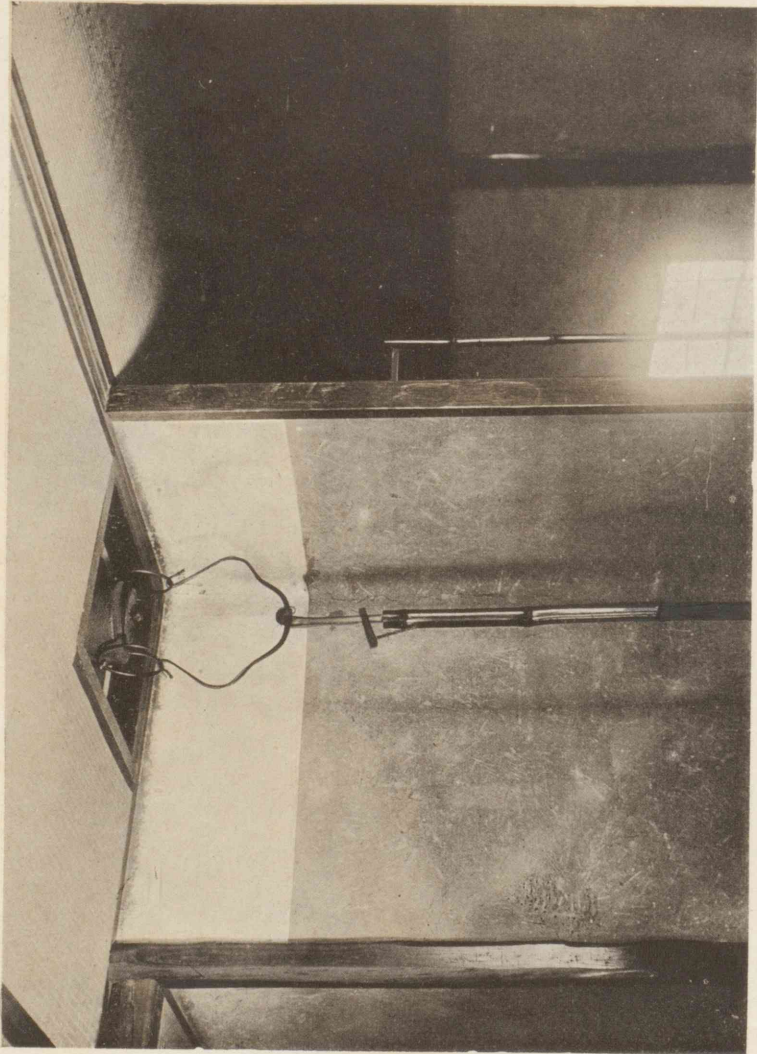
精行とは、行に精しいといふことで、一々の動作に心がこもるの意味である。一舉手一投足は勿論、一器を扱ひ、一物を動かすにも、心の奥の鏡にかけて、餘裕のある姿を寫すことである。小さい室をも廣く^{ゆたか}胖に住みなし、細く短い茶杓を拭うても、太く長い物を清むると同じ様な心を宿し、軽い羽箒を動かしても、おもやかなる扱に心の莊重を表し、重い水指を運んでも、易々として従容の心を現す。是等の習によつて、この精行が修練されるので、かやうな間に、小を小とせず、乏しきを乏しとせざる道念が養はれ、事々物々に對して、その來由を知り、これに接して法悦歡喜の情、感謝報恩の念を養ふやうになるのである。一粒の飯、一本のマツチも、今わが目前一瞬の用を辨ずる事によつて、この物の一生は終るなりと觀ずれば、決し

知足安分

素す

てこれを軽々しく用ひる心が起らぬのみか、このさゝやかなるものに宿る廣大無邊なる自然の力、天地の恩に氣がついて、感謝の生活、知足安分の境遇に入らずには居られなくなる。これが即ち儉徳である。こゝにおいては誇るべき奢もなければ、愧づべき不及もない。これ、その位に素して行ひ、その外を願はざるの境であり、知足の法は即ち是富樂安穩の處である。和敬清寂の四字にみちびかれつゝ、精行儉徳の人となる。これが茶道の修であり證である。

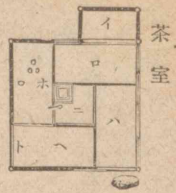
和敬清寂といひ、精行儉徳といふ、この心身をねる第一歩は感受性を鋭敏ならしむるに在る。その爲には、特に或境地を作つて、そこへひき入れ、それにひたらせ、それを味はしめねばならぬ。これが心の教育であり、茶道の修練である。謂はゆ



(村崎山大都訓乙府都京・内庵喜妙)

室

茶



茶室
イ 床。ロ 貴人
壘。ハ 客壘。ニ
爐壘。ホ 道具壘。
ト 踏込壘。ト
通ひ口。

紹鷗

武野氏、茶道の大
家、利休の師、弘
治元年(三三三)歿、
年五十三。

書院式

る、或境地とは、言ふまでもなく茶室のことである。細かい所
までよく氣づかしめるには、大きい廣い散漫な部屋ではいけ
ない。それは起居振舞の爲に動く微な風をも感ずるやうな
小室でなければならぬ。珠光は在來の大きな室を縮めて、始
めて四疊半を作つた。心をねるといふ事に氣づく時、これは
尤もなことであつたと思ふ。紹鷗はこの古規に則つて四疊
半を作り、更に室内の趣を簡略にして、これを草の座敷と稱し
た。利休は師の紹鷗と相談して更にこれを二疊半に縮小し
た。これは一面に於ては、華麗な書院式の裝飾を適用する餘
地のないやう、知足安分の生活を可能ならしめるやうに工夫
したのであらうが、心をねるといふ他面から考へても、かくせ
ねばならなかつたのである。

六根

露地

又茶室を普通北向とし、南の光線をさけて幾らか薄暗い室とするのも、この静の境地を作らんが爲である。かゝる工夫によつて作り上げられた室内で心をねるに當つて、最も都合よく、又最も重き役目をなすものは、かすかなる感じである。静かなる境地に於て、眼・耳・鼻・舌・身・意六根の微妙なる活動が營まるゝ時、心の世界の未だ嘗て開かれなかつた部分の門が開かれる。その中でも、耳の力が最も強い。主人は客の一舉一動から出る音に心の耳をすまし、客は主人の働から出る音に心の耳を洗ふ。されば茶には種々の響がある。來著の旨を報ずる板はの音は、客が主人の心に響かず第一の響である。これを聞いた主人が出て迎ふるに方つて、手水鉢の水を改めんとて、さつとうつす水の音は馳走の最初の響である。露地の

南坊録

宗啓著、茶道のこ
とを精細に記せる
書。

功者

得道

照顧脚下

つくばひ

飛石を渡れば下駄の響がする。南坊録に「露地の出入に下駄はくこと紹鷗以來の定なり、草木の露深き所を往來する故かくの如し、樂に沓の音功者不功者をきゝ知る。」といひ、又「かしがましくなきやうに、又、さし足するやうにもなく、おだやかに無心なるが功者と知るべし。得道の人ならては批判し難し。」と
いうてある。かうなると下駄の音も中々むつかしくなる。併し、これも亦照顧脚下の一で、これによつて、足元に心を置く良習も自ら養はれる。つくばひで手水を使ふ音の清々しさと、手を洗ひ終つて立上る時に出る下駄の音とは、次客への合圖となるので、たゞ單に主人へ響かせるだけではない。やがて席入りの爲に、戸の音がする。疊ざはりの音はその人の品位を偲ばせ、更に客自身の心をも落ちつかせる。客一同が入

手前

賤山がつ

席し終るまで、その動作から出る響がついて主人の心に通ふので、水屋に端坐して之を聞けば、壁をへだてて客の一姿一態を心に見るのみならず、その響によつて客の心持までをも察することが出来る。又、主人が手前の間に工夫して出す種類の響は、皆自然を偲ばせて、微なる音に深い意味を添へてゐる。即ち、茶碗に汲入れる水の音を笥の音にかよはせ、茶筌に谷川のせゝらぎを偲ばせ、賤山がつの斧の音をひゝかす等、山里の趣を取集めて、静境に幽趣を添へる。

楽音

これ等の響の背景として、終始一貫するものは釜の湯の煮える音である。通常これを松風というてゐる。この松風は楽音と違ひ、旋律の影響を受けてゐないので、静寂の興趣を一層深からしめ、落ちついて聞いてゐると、心を大森林の奥、大幽

茶味

奥田正造著、茶道の眞諦を平易に説いたもの、大正九年（一九二〇）五月刊行。

谷の底までも持つて行つてしまふやうな心地がする。太古の如き静けさの内に、その幽趣を増すものは、松韻と谿聲とである。これを四疊半裡にうつしてこの趣を偲ばしむるは、實に茶境の力である。

かく心の耳を澄まし來れば、微なる感じは、たゞ微なる感じではなくなつて、その微なる感じの彼方に續ける、大きな重き意義の世界が開けてくる。經に「其ノ音聲ヲ觀ジテ皆解脫ヲ得。」とある、所謂觀音の妙境とは即ちこれである。

（茶味）

鶴見祐輔
群馬縣の人、評論家、明治十八年(五)誕生。

二 太平洋時代

鶴見祐輔

ハワイ
太平洋中の群島で、米國に屬してゐる。
南加州
米國の太平洋岸カリフォルニア州の南部。
ジャバ
馬來群島中の一島、オランダに屬す。
パナマ
パナマ地峽のパナマ運河の西口の町。

黒潮の貫き走る太平洋といふ海が、日本の岸邊を涼々と洗つてゐる事の深い意味が、近頃ますます強く私に迫つてくるやうな氣がする。私はこの大きい海をいろ／＼のところから眺めた。太平洋上の十字街路といはれるハワイの碧い波も見た。やがては太平洋岸のニューヨークになるといふ、南加州はロスアンゼルスロサンゼルスの港の水の温ぬるむのも見た。古今千年の夢を封ざるロマンチックなジャバの島陰の藍色の濤も見えた。二十世紀の風雲を懷に抱くパナマの町のほとり、烈日の下にきら／＼輝く水も見た。しかし、何と言つても、私は太平洋は日本の海だと思ふ。

汪洋と

芙蓉峰

一月の初にも、青い葉蔭に蜜柑の薰る伊豆半島から見た海路、桃の花の咲きこぼれる折、ぼか／＼とした春の日ざしを背にうけながら眺めた駿河灣の碧い水、楠の大樹の影をひたしたまゝ、汪洋とうねる土佐灣の海波、それらの一切が日本の太平洋である。北の方には鯡を追ひ、南の方には鮪ササギを漁るのが日本の太平洋である。駿河灣の波打際から一躍天に迫る一萬二千尺の芙蓉峰ともなれば、伊豆の大島から四五里にして、一落六千尋の世界第一の深い海ともなるのが、日本の太平洋である。

天はこの小さい島の中に、寒帯と温帯と熱帯との動植物を與へ、海に近き最高峰と陸に近き世界最深海とを與へ、積雪五尺の寒威と五丈の竹藪を生ずる熱氣とを併せ與へ、スピスの

劫初

風景にフランスの氣候を恵み、一つの民族を二千五百年の間閉ぢこめて置いて、全世界の國々の榮華の次ぎ／＼と繪巻物の様に繰りつくす日迄、この國を保存してくれたのである。この一切の恩恵は、太平洋といふ海の賜物なのだ。劫初以來、幾萬年、幾千萬年、滔々とこの島根を洗つてゐた海の上に、たうとう全世界の文化の中心が廻つて來たのだ。

さうだ、太平洋時代といふ大きい時代が、いまこの翠浪皓波の上にめぐつて來たのだ。さうして、その海の一人の祕藏息子として、その懷に深く抱いてゐた日本といふ島が、この大きい舞臺の上で、滿身に脚光を浴びて立たなければならぬ時が來たのだ。

併し、私はそれをたゞに耳に快き日本至上主義の讚美歌と

脚光

して謳ふのではない。天と地との恩恵が、さういふ時代と境地とを吾々に與へてくれたとしても、この島の上に住む人々が、その大きい運命の高さにまで伸上る事が出來なかつたら、所詮は、それが空しき天の時であり、空しき地の利に終るのではないか。

それでは、吾々は、どうしてこの大きい運命の呼び聲にこたへるか。どうしてこの大きい海の恩寵に報いるか。それは未來のことである。しかし、未來の暗示は過去の史實の中にあるのだ。五千年の記録された人類史の中に、おなじやうな運命に恵まれて、見事に花を咲かせた民族が一つならず二つまでもあつたのだ。その二つの民族の足跡をたづねて見れば、この大きい運命の扉の前に立つてゐる日本民族の大きい

啓示

啓示がわかるのだ。

世界中で一番大きい海
太平洋の面積約一
八〇二二萬方呎



オリーブ

今までに人類の文化は、二つの大きい海の周圍に榮えた。その一つが地中海といふ海で、いま一つが大西洋といふ海であつた。さうして、世界中で一番大きい海が、最後まで残されてゐた。その海が太平洋なのだ。地中海に比べて七十倍、大西洋に比べて二倍もある大きい海が、この太平洋なのだ。その過去の二つの海は、それ／＼一つづつの祕藏息子を持つてゐた。地中海といふ海は、オリーブの花咲く希臘といふ小さい半島を——三方は水に圍まれて、北の方は高い峰で大陸と遮斷された島同様の小さい半島を、その胸の中にしつかと抱いて育んだ。この小さい半島の中から、世界に比類のない偉人の數々が出て來て、手のひらほどの土地に世界文化の

萌芽を養ひ、やがては燦然と眼もあやなる文明の花を咲かしたのであつた。

その地中海の文明時代が、アメリカ大陸の發見とともに、大西洋に移ると、またこの大きな海が一つの小さい土地を選んで、大事な祕藏息子として育てあげた。それは冬も芝生の青と繁るイギリスといふ小さい島であつた。僅か二十哩の海峡で、大陸と絶縁されたこの國は、海に陸に富強の實を擧げて、やがて朝日のやうな晴やかな國運をひらいた。希臘の文明が去つてから、もう二千年になる。しかし、それは偉大なる莊嚴さを備へて、今日も西歐文化史の最高位に輝いてゐる。その榮光は、人類の存續する限り永久に消失せないてあらう。イギリスの文化は、希臘ほどの絢爛さはない。しかし、何とい

アメリカ大陸の發見
西曆一四九二年コ
ロンブスが發見し
た。

中樞

つても、大西洋文化時代の中樞を握つてゐる。そして、古代希臘の文運が羅馬といふ現實的大帝國に移つたやうに、今やその文化は、アメリカ合衆國といふ物質的には無比の強大國に移りつゝあるのである。

しかしながら、眞の文化は、古々椰子の如く水のほとりてなくては榮えない。大陸の風土と産物とは、人の氣を荒立たせる、人々の視野を狭くする、好尚を俗惡にする、現實享樂の生活に墮せしめる。この時、海のみが——ひとり海のみが、汪洋として千古にわたる波濤の純潔さて、人間に永遠を慕ふ心を惠み、その視野を廣くし、その性情を簡素にし、その趣味を高雅にし、極端を厭うて中庸の徳を愛せしめ、力を禮拜せずして、心靈を欣求せしめ、手を額にして日輪沈む西方不朽の境を憧憬せ



古々椰子

中庸の徳

アゼンス
アテネ、現ギリシヤ
共和國首府。

發祥する

範疇

しめる。故に、永久の文化は水に圍まれる國に起つた。その適例が古代希臘の小さい都市國家である。國土に於ては、日本の九州か北海道ほどで、人口に於ては、最大のアゼンスすら精々七十五萬餘に過ぎない小さい希臘の都市國家がそれである。今日全盛期にある西洋文明の搖籃は希臘にある。哲學、史學、自然科學、詩歌、戲曲、彫刻、建築、數學の一切が、この小さい半島から發祥してゐる。否、發祥したるのみならず、今日の文化を以てしても、猶その範疇を脱しきらないではないか。

今日希臘の古蹟を發掘すると、到る處から現れるものが、ここごとく藝術的の價值がある。これに反して、羅馬郊外の土中から掘出されるものは、殆どロンドンの塵箱中の瓦礫と異ならない。それは古代希臘人のすべてが、不朽なる美を創造

せんとする一念に燃えて居たためである。しかも、その希臘の美は、單純さと純眞さを持つてゐたので、他國の藝術のやうに、不自然なる裝飾的精神に驅られて居なかつたといはれてゐる。

この點に於て私は、日本精神と希臘精神との共通性を強く感じる。私はつねに、日本精神の偉大は、その單純性と、中庸性と、調和性にあると思つてゐる。單純を好むの心は自然のままの眞を好むの心であり、生まれたるまゝの誠を好む心である。日本古代の宗教や建築や文學を見るものは、如何に吾の祖先が單純を好みたるやを知る。去つて支那に行け、印度に行け、埃及に行け、これ等の國々の色彩の如何に強烈であり、裝飾的であるか。日本と希臘と、そしてイギリスの色彩の

悟入する

簡素であり、自然であるのは、これ實に島國の特權である、水の恩寵である。大陸の民族の悟入する能はざる精神の純潔である。

或る者

ヴァン・ルーレン。

具現

それから私は中庸といふことを言つた。この中庸の精神は明らかに日本の精神である。しかるに、西洋の史學者の或者は、希臘の勃興を説いて、「人類の歴史に於て、中庸の徳を最も民族的に具現したのは希臘人である。」と述べ、「この中庸の徳操が現れて、始めて人類文化が一飛躍をなして、従前の野蠻時代に一新紀元を劃した。」と言つてゐる。しかし、それは其等の人が日本民族の歴史を知らなかつたためである。私は、日本民族の偉大は、この中庸性にあつたと思ふ。吾々の祖先は、大陸人のやうに極端な性情を持たない。一個の氣品ある中庸の

神韻

性情が、日本古代史を一貫してゐる。感情に於ても、美を慕ふ情操に於ても、道徳に於ても、生活に於ても、日本民族は、大陸の人々のやうに、深刻にも極端にも流れなかつた。そこには一種の神韻とも言ふべき氣品があつたと思ふ。

それから、日本民族の偉大はその調和性にある。吾々日本人は、殆ど無意識に周囲と自分との調和といふことを考へて居る。それは倫理的といふよりも、むしろ藝術的本能からである。吾々は、自分一人の生といふよりも、自分が家族といふ周囲、村といふ周囲、國家といふ周囲、さらには宇宙といふ周囲に、如何に調和すべきやと言ふことを本能的に求めてゐる。それは、調和なき社會は美しくない社會であるからだ。その大いなる全部といふことをあまり始終念頭に置いて、そのた

劈頭

サラエーヴォ

もとの奥國領ボスニア州（現在ユーゴスラヴィヤ國）の地、舊セルビヤに接してゐる。

拍子木

めに、小さい我を犠牲とすることをあまり修養したために、吾日本人は個性の發揚といふ方面を等閑に附して來た。調和好みの性質が強き心靈の獨得自由な發達を妨げた。全宇宙の調和といふことについて、外國に教へ得る日本は、個人自由の思想に於ては多くを希臘から學ばなければならぬ。希臘の偉大は、個人自由の精神の發揮であつた。しかも、その自由奔放の精神は、克己自製の徳操で緩和された。この節制と自由との平均が古代希臘を偉くしたのだ。

しかし、その希臘は去つた。地中海の文明は移つて、大西洋の時代が起つたが、ついで、歐洲大戰の劈頭にサラエーヴォの一街頭に鳴響いた銃彈の響は、大西洋時代の幕の閉ぢる合圖となり、同時に、太平洋時代開幕の拍子木であつたかも知れな

立役者

い。
 到頭太平洋時代が来たのだ。この時、日本の視野に入ったのが海に向かふの米國なのだ。日本と米國、さういふ大きい二人の立役者を舞臺に置いて、太平洋時代の幕が今開いたのである。日本民族は如何にしてこの大きい運命に向かはうといふのか。

水に囲まれた日本は、希臘やイギリスと同じ様な天恵に満ちてゐる。海は青く、日は輝いてゐる。但し、島人は今健在であらうか。いま潮は寄せ、東は白み、海潮音のとゞろきは日本民族の脚下に鳴りわたつてゐる。この時、曉の巖頭に立つて、聲朗に、自由と、單純と、純真と、中庸との日本精神を呼びおこして、太平洋時代の文化を建立しようとする雄心は、我が若き日

本のうちに生まれてゐるであらうか。その爲には、今日の日本は大きい生みの苦しみを覺悟してかゝらなければならぬ。精神の高貴を回復する爲には、民族的青春を回復する爲には。

(北米遊説集)

北米遊説記

鶴見祐輔著、日本の國民の眞情を米國の民衆に理解させようとして遊説したときの論説をあつめたもの、昭和二年(癸七)七月刊行。

女子新國語讀本

新制版 卷八終

文部省檢定濟

昭和三十二年二月十五日 高等女學校實業國語科用

昭和十二年八月五日印
昭和十二年八月十五日發
昭和十三年一月二十二日訂正再版印刷
昭和十三年一月二十七日訂正再版發行



發行所

東京市神田區神保町一丁目二十五番地
振替口座東京二六四四番
大阪市東區博愛町五丁目五十六番地
振替口座大阪四七一番

編者
印發者兼
發行所

女子新國語讀本 新制版
定價各金六拾錢

澤瀉久孝
木枝增一
東京市神田區神保町一丁目二十五番地
會社 東京修文館
代表者 鈴木金之助
大阪市東區博愛町五丁目五十六番地
會社 東京修文館
代表者 鈴木常松

東京修文館
會社 東京修文館
會社 東京修文館



B
中

37

寧
久
邨